(一〇)後漢馬援傳に介介獨惡是耳とあつて註に介介猶耿耿とある、耿耿は心に記して忘れぬことである。

と曰つたまま卷を執つて高らかに吟むのであつた。孝兒は起ちあがつたが哭失聲面を掩つて去つてしまつた。生は青鳳の所に如つて告以故した。女は色を失つて曰つた、

「果救之んですか否いんですか？」

生は曰つた、

「救ること則、救けるのサ、適、不之諾かつたのは、亦、聊と前の横に報いたのさ」

女は乃で喜んで曰つた、

「妾、少いとき孤になつて、叔さんの依で成立なつたの。昔は獲罪だつた雖ど、乃は家範で應爾だわ」

生は曰つた、

「誠く爲さ。但だ使人不能無介介つていふんだ。卿が果く死んだんなら、定と不相援さ」

女は笑つて曰つた、

「忍哉！」

次日になると莫三郎が果してやつて來た。鏤のうまの膺、虎のかはの韔といふいでたちで、僕從を甚赫ひきつれてゐた。生は門まで逆へたのであつたが、見ると、獲の禽が甚多ある中に、毛革に血が殷くついてゐる一匹の黑狐があつた。撫ると皮肉が猶だ溫かである。で、裘が敝れたから、乞得て補綴たいと託つた。莫は慨然く解いて贈れた。で、生は卽ぐ

(一一) 慈烏が長じて親に食物を與へることを反哺といふ。哺は口中にある食物のこと。

青鳳に付し乃、自分は客と飲むのであつた。客が既去つてから女は狐を懷に抱いて溫めたが、三日たつて甦り、展轉つたとおもつたら叟に化爲て居た。そして目を擧げて鳳を見ると、人間では非いと疑ふのであつた。女は歷り其情を言した。叟は乃と下拜をして前の愆を慚もし謝りもしたうへ、喜さうに女を顧て曰つた、

「我は固ら汝を不死んだと謂つて居たんだが、今果然だつた」

女は生にさう謂つた、

「君が如し妾のことを念つてくださるんなら、還た乞ぞ樓宅を假してうだい。そして妾に得以申返哺之私」

生は之を諾した。叟は赧然さうに謝をのべて去つてしまつたが、入夜ると、果して擧家で來たのであつた。由此は家人父子の如に復う猜とか忌とかいふことは無かつた。

生は書齋にすんで居た。そして孝兒と共に時をり談しをしたり、讖んだりするのであつたが、生の嫡出の子が漸だん長きくなつたので、之の傅にすると、循循と喜く敎へて、師範なのであつた。

(一) 朱で塗つた大家の門である、杜甫の詩に出入朱門家華屋列蛟螭とある。

畫皮

太原の王生が早く行つて居ると、一の女郎が襆を抱へ、獨りで奔いてゆくのに遇つた。甚く艱於歩でるやうなので、急歩に趁之と、十六ぐらゐの姝麗だつた。生は心相愛樂び、

「何うして夙夜踽々に獨りで行いてるんです」

と問ねると、女は曰つた、

「行道の人が、愁憂を解してくださることは不能んですから、何勞相問さい」

生は曰つた、

「卿、何んな愁憂なんです、或效力の可ることなら、不辭せんよ」

女は黯然に曰つた、

「父や母が貪賂れて、妾を朱門に鬻つたんです。するとその嫡が甚うな妒で、朝は詈る夕は楚辱之といふんですから、所弗堪に遠くへ遁げようとしてゐるんです」

生は問いた、

「何へ之かうツてんです」
女は曰つた、
「在亡てる人のうへですもの。定つた所なんか有りやうが無いじやありませんか」
生は言つた、
「敝蘆は遠くないんです卽、煩抂顧な」
女は喜んで從之ことになつた。生は代つて襆物を携ち、導て與同に歸つて來たのであつたが、女は室に無人いのを顧て問いた、
「君、何うして家口が居ないんです」
生は答へて曰つた、
「これは書齋なん耳」
女は曰つた、
「此所は良とに佳わ。如も妾を憐さうだとおもつて活之つてくださるんだつたら、祕密にして人に洩れないやうにしてね」
生は諾之し乃、與寢合んだ。密室に匿れさしておいたので、數日か過ぎた而ど人は不知かつた。そのうちに生が微りと妻に告すと、妻の陳氏は大家の媵妾だらうと疑つたので、遣之やうに勸めたけれど生は聽かなかつた。

(三) 厭は壓へ鎭めること。襄は變異を卻けること。

偶き市に適て一の道士に遇ふと道士は生を顧て愕し、

「何に遇つたんだい？」

と問ねた。生は答へて言つた、

「なんでも無いんです」

すると道士は曰つた、

「君の身を邪氣が縈繞いて居るのに何でも無いなぞと言ふのか！」

生が又力白ると、道士は去きながらさう曰つた、

「惑つたものだ！　世のなかには死將臨て居ながら悟ることのできない者もあるんだ！」

生は道士のいふ言が異なので、頗く女を疑つてはみたけれど、明らかに麗人なんだ。何の至爲妖ものかと、轉思し、道士が厭襄(三)に借け獵食をするのだと意つたのであつた。

無何、書齋の門に至たが、門が中から杜めてあつて入ることが不得いので、心に女の所作を疑ひ、垣の埆をのり踰える則、室の門も亦り閉つて居た。躡迹をして窓から窺之と、翠色い面をして鋸の如に齒の巉巉つた獰しげな一つの鬼が、榻の上に人の皮を鋪き、采筆を執つて之に繪いて居るのであつた。が、已て采筆を擲して皮をとり擧げると、衣を振ふ如な狀をして身に披つた。遂して化けて女子に爲つた。生は此狀を見て大く懼れ、獸伏になつて出てくると急いで道士のあとを追ひかけたが所往が知れない。偏迹之したする、やつと野

(三) 狼は貪慾で無暗に食物を聚めるから、いつもあたりが散らばつて居る、それで不整頓なことを狼藉といふのである。

(四) 盧志が陸士衡に、陸遜陸抗は君の何人に當るかと問ふたので、君の盧毓盧珽のやうなものサと答へた、そして弟の士龍に我が祖父の名は海内に播つて居て知らぬ者は無い、鬼子敢爾といつたさうだ。

はらで遇つたので長跪いて救を乞めた。道士は曰つた、

「之を遣除つてあげよう。しかし此物も亦り良う苦んでゐるので、甫能と代りを覓したのだから、予も其の生を傷ふことは不忍のじや」

乃、蠅拂を生に授し、寢門に挂けさせることにしたが、別れる臨、こんどは青帝廟で會はうと約束したのであつた。

生は歸つたけれど書齋には敢う入らずに、内室に寢ることにして拂子を懸けておいた。一更の許、門の外で戢戢といふ聲がした。自には不敢窺ので妻に窺かすと、女子が來たけれど、拂子を望て進むことが不敢かつた。で、立て切齒をして居たが、良久すると去つてしまつた。けれど少時に復た來て、

「道士は我を嚇かしてるんだが、終不然。口に入れたものを寧んで吐き出すもんか」

と罵つて、拂子を取ると之を碎き、寢門を壞して入つて來たが、經ぐ生の牀に登つて生の肚をひき裂き、生の心を掬ひとつて去つてしまつた。

妻が號んだので、婢が入つてきて燭してみると、生は已に死んで、そこらは腔血狼籍になつて居た。陳氏は駭きかなしみ、ただ涕を流すばかりで聲も敢う出さぬのであつた。

明日、弟の二郎をやつて道士に告はせると道士は怒つて曰つた、

「我は固と憐んでやつたのに、(四)鬼子乃敢爾！」

卽、生の弟に從て來てみると女子は已失所在つて居たのである。既而に道士は仰首で四を望はし、

「幸せと未だ遠くへは遁げて居ない！　南の院は誰れの家じや」

と問いた。二郎は曰つた、

「小生の舍る所です」

道士は曰つた、

「現は君の舍に在る！」

二郎は愕然いたが、未有だらうと以爲つて居ると、道士は曰つた、

「不識ものが一人來ては曾否有？」

二郎は答へて、

「僕は青帝廟に赴つてたので、良く不知いんです、歸つて問ねてみませう」

と曰つた。そして少頃して返つてきて曰つた、

「果に有之した。晨間一の嫗が來て、僕家の操作に傭はれ欲いといふので、室人が止めておいたのが尙だ在るんです」

道士は曰つた、

「卽が此物じや」

で、與俱に往くと、道士は木劍を仗つて庭の心に立ち、

「業魅！　我の拂子を償來！」

と呼曰つた。すると媼は惶遽て色を無ひ、門を出て遁げようとした。道士は逐ひかけていつて之を擊つた。媼は仆れた。ト、人皮が劃然と脱れて厲しげな鬼と化り、臥れたまま豬のやうに嗥えるのであつたが、道士が木劍に其首を梟けると、身は濃煙と變作て地を匝ひ堆かくかたまつて居た。道士は一の壺蘆をとり出して塞を拔き煙の中にそれを置いた。すると口で氣を吸ふやうに々然と吸ひこんで瞬息くまに煙は盡つた。道士は壺蘆の口を塞いで囊に入れ、共に人皮を視ると、眉から目から手足までが無不備具ゐて、道士が之を卷くと、畫軸を卷く如な聲がした。道士は亦り之をも囊に入れて別欲去とするので、陳氏は門に拜して道士を迎へ、哭いて夫の回生る法を求めたのであるが、道士は不能といつて謝つた。陳氏は益す悲しんで地にひれ伏し、起きようともしなかつた。すると道士は沈思をしてさう曰つた。

「我は術が淺くて誠く起死せることが不能のじやから、我が一る人を指へてあげよう。或つたら能之かもしれんで、往つて求んだら必と効が有るじやらう」

で、

「何人ですか」

(五) 莊子に廣成子、南首而臥黃帝順下風膝行而進再拜稽首而問とある、

と問くと、道士は曰つた、

「市に瘋がゐて、時も糞土の中に臥てゐるじや、叩ねて哀願で試なさるがよい。倘し夫人を辱かしめるやうなことがあつても、夫人！怒つては勿んぞ！」

二郎も之の瘋を習之て居た乃、道士に別れて嫂と與に往つて見ると、その乞人は道上に顚んで歌をうたつて居るのであつたが、三尺も鼻涕をたらし、穢くて不可近ほどであつた。

けれど陳氏は(五)膝で行るいて前んでいつた。すると乞人は笑つて、

「佳人我を愛するか？」

と曰つた。で、陳氏が故を告すと、又大そう笑つて曰つた、

「人は盡な夫だ。活かして何う爲る」

しかし陳氏が固く哀之む乃、

「異だなア！　人が死んだ。而で我に活かして乞といふんだ！　我は閻摩か？」

と曰ひながら怒つて杖で陳氏を擊つたが、陳氏は痛いのを忍して之を受けるのであつた。

そのうちに市の人たちが漸々集つて堵の如にとりまいた。乞人は盈把い啖唾を咯いて、陳氏の吻に擧向つて、

「之を食へ！」

と曰つた。陳氏は面を紅漲にして有難色たのであるが、既て道士の囑を思ひだしたので遂う強してそれを啖ふと、喉中に入つて團絮のやうに硬くなり、咯々と下ていつて胸面のところに停結つてしまつた。乞人は大そう笑つて、

「佳人我を愛するか？」

といふと、起ちあがつて不顧に行くのを、尾ていくと、廟の中に入つてしまつた。迫つて求うとしたが所在が知れないので、前後冥捜したけれど殊に無端兆かつた。陳氏は慚ぢもし恨みもして歸つてきた。

夫の亡つた慘さを悼き、唾を食はせられた羞しさを悔み、陳氏は俯仰つて哀啼つつも、但だ即死たいと願ふのであつたが、方く血を展いて尸を斂めようとしたけれど家人は竚つて望てゐるばかりで、敢近づく者もなかつた。で、陳氏は尸を抱へ腸を收め、且理且哭をしてゐたが、哭極聲嘶て頓に欲嘔になつたとおもふうちに、鬲中から結つた物が突奔出てきて不及回身く已う尸の腔の中に落ちてしまつた。驚いて視之と、それは人の心で腔のなかで突々猶だ躍つて居たが、たちまち煙のやうに熱氣が騰蒸つてきた。大そう異におもつて、急に兩手で腔を合せ、極力りに抱擠へて居た。少しでも懈めると熱氣が氤氳と縫中からもれ出るのであつた。乃で繪帛を裂いて、急いで之を束り、手で尸を撫てゐると、漸々溫かになつてきた。衾裯を覆け、中夜になつて啓けて視たら鼻息がして居た。そして天明けになると竟う活

きかへり、

「恍惚して夢の如だ。但だ心が隱痛むばかりだ」

と言つてゐた。

破れた處を視ると、痂が錢の結に結いて居た。尋て癒つたのである。

賈兒

楚の某といふ翁さんが、賈於外たあとを、獨でくらして居る婦さんが、夢にある人と交り、醒めて捫之つたら、それは小な丈夫であつた。情に人と異つたところがあるので、狐と知つたが、未幾く牀を下りて去るかとおもふと、門が未開のに已う逝つてしまつたのである。

入暮れたので、庖の媼さんを邀れてきて伴焉にゐた。十歳になる子が素から別の榻に臥てゐたの亦、招びよせて與俱になつた。

夜は既う深けた。媼さんも兒も皆な寢てしまふと、狐が復やつて來た。

婦さんが喃々夢の如に語すので、媼さんが覺て呼之と、狐は遂去しまつた。自是らかみさんは身が忽々して若有忘をしたやうになつた。

夜に至ると、不敢息燭にして、子に睡勿熟ぬやうに戒けさせたが、夜が闌けて、兒と媼さんとが壁に倚りかかつたまま少と寢て醒めたら、婦さんが失かつた。遺に出ていつたのだら

うと意つて、久いこと待つてゐたけれど至ないので、始と疑ひだしたのである。しかし嫗さんは懼がつて不敢往覓かつたから、兒は火を執つて偏り燭火してあるいた。

他の室に至く則、母おやが裸で其中に臥てゐた。近つて扶けおこしても、亦に羞縮ふやうすもなかつた。

自是ら遂う狂つて、歌つたり、哭いたり、叫んだり、詈つたり、日は萬な狀をし、夜は人といつしよに居るのを厭つて、另な榻に兒を寢かし、嫗さんも遣去てしまつた。

兒は母おやが笑ひながら語してゐるのを聞く毎に、輙起きて火之けた。すると母おやは反つて怒てて兒を呵つた。けれど兒は亦う不爲意かつた。因共なは兒の膽いのを壯なりとするのであつた。

然し母おやの嬉戲は無節く、まい日、坊者の效をして、磚石を窓に疊げ、之を止めても不聽かつた。或がその石の一を去ける則、地に滾んで嬌啼んだ。それから人も氣に觸るやうなことを敢てするものが無くなつた。

數日かが過ぎると、兩の窓は盡り塞がつて少しの明もなくなつた。已乃ら合泥つて壁の孔を塗りはじめ、終日營々いて不憚其勞かつたが、塗已所作る遂、厨刀を把つてきて、霍々磨刀のであつた。で、見る者は皆な婦さんの頑なのを憎み不以人齒かつた。

兒は宵分ると懷に刀を隱し、匏のからで燈を覆ほつた。そして母おやが囈語をいふのを

(一) 木蘭の詩に、爺、娘、聞、我、來、出、郭、相、扶、將、阿、姉、聞、我、來、當、戶、理、紅、妝、小、弟、聞、我、來、磨、刀、霍、々、向、豬、羊、とある。弟は姉さんが來たといふのでうんうん庖丁を磨いで豚や羊の料理をしようとするといふのである。霍ははやいかたち、ここではうんうんと譯しておく。

伺つて急に燈を啓け。門を杜めて聲喊つたけれど、久之も異が無かつた乃で、門ぐちを離れ、揚言詐つて、作欲溲狀をする歟、有一物、貍の如なものが、門の隙から突奔した。急いで擊之けて、僅と其の尾を約れ二寸許り斷りとつた。濕血が猶だ滴つてゐる。で、初めて挑燈起げると、母おやは詬罵るのであつたが、兒は若不聞をして、擊之不中たのを懊恨みつつ寢んだ。そして雖不卽戮ど可以幸其不來と自念たのであつた。

及明つて視ると、血の迹が踰垣而去ゐて、迹之ると、何氏の園の中に入つてゐた。

夜に至つた。あやしいものは果して絕なつた。で、兒は竊かに喜んだ。但ど、婦さんは癡り死んだやうに臥てゐるのであつた。

未幾く賈人が歸つてきて、就榻で問訊ると、婦さんは視若仇に嫚罵つた。

兒が以狀對したので、翁さんは驚いて醫を延き藥をのませようとしたけれど、婦さんは藥を瀉して詬罵るので、潛り藥を湯水に雜て飲すのであつた。

數日かすると漸だん安いたので父子は俱に喜んだが、一夜、睡醒ると、失婦所在なつてゐたのを、父子は又別の室で覓得けた。由是ら復た氣が顚つて、夫と同じ室に處るのを不欲り向夕になると別の室に奔むので、之を挽きとめると、益ます甚く罵るのだつた。翁さんは無策いので、盡り他の扉を扃たけれど、婦さんが奔つて去く則、扉は自に闢いた。翁さんは患之して驅禳に備至したけれど、殊に少の驗もなかつた。

(二) 噥々は早くちではつきり分らないこと。ここでは前後の關係からこそこそと譯した。

(三) 母の兄弟を舅といふ。夫の父を舅といふ。妻の父を外舅といふ。ここでは母の兄弟。

(四) 舅の妻を妗といふ。

兒は薄暮、潛り何氏の園に匿びこみ、葬の中に伏れて狐の所在を將以探うとした。月が初と作た乍、人語が聞へるので、暗に蓬科を撥けると、二人が飲んでゐて、老櫻色のきものを衣た、鬚の長い一の奴が壺を捧げてゐるのが見えた。ふたり俱、細いこゑで語てゐるので不甚可辯かつたが、移時して一人の曰ふのが聞へた、

「明日白酒を一瓶拿つて來いよ」

頃之すると、俱に去つてしまつて、惟だ鬚の長いのが獨りだけ留り、衣を脱ぐと庭石の上に臥た。之を審顧ると、四股は皆な人の如だつた但、尾が後部に垂れてゐた。兒は歸らうと欲つたけれど、狐に覺られるのを恐れたので、遂ろ終夜伏れてゐた。未明になると、二人が以順に復たやつて來て、(三)噥々はなしながら竹叢の中に入つてゆくのが聞へた。兒は、乃、歸つた。翁さんが所往を問くので、何伯さん家へ宿つたのだと答へた。

適、父に從て市に入くと、帽肆に狐の尾が挂してあるので、之を市つてくれと乞んだけれど、翁さんは不顧かつた。が、父の衣を牽つて嬌聒之ので、不忍過拂に市焉てやつた。兒は、父が塵中で貿易をしてゐる側で戲弄んでゐたが、父が他顧をしてゐるひまに乘み、錢を盜つて出て去つた。そして白酒を沽つて肆の廊下に寄け、獵を素からの業にして城内に居んでゐる舅さんの家へ奔けていつた。(三)りから舅さんは他出つてゐた。(四)妗さんが母おやの疾を

(五) 目方である。

(六) 凡以麺煮之皆曰湯餅と青箱雑記にある。すゐとんと譯さうかとも思つたのであるが子供の御馳走だからだんごと譯しておいた。

詰ねると、兒は答へて云つた、

「連朝は稍し可くなつてたのに、又秃が衣を嚙つたので、怒つて啼不解てるもんだ故、獵藥を乞に我を遣たの」

妗さんは櫝を撿べ、(五)一錢許をとり出して、裏んで兒に付した。兒は之を少いとおもつたので、妗さんが湯餅(六)を作へて兒に啖べさせ欲として、室に人けの無いのを覷すまし、自で藥裏を發け、竊と盈掬つかんで懐に入れる乃、趨けていつて妗さんに告つた、

「火を擧さ勿いでもいいよ、父つあんが市中で待つてて食ふ遑が無いんだから」

遂、經ぐに去ていつた。そして隱り酒の中に藥を置れ市上を遨遊ついてから、抵暮、方と歸つて來た。父が所在を問ねるので、舅さん家に在たことに託いた。

兒は自是ら日ごとに塵肆間を遊んであるいた。一日、長鬚人が亦り儔中に雜つてゐるのを見た。兒は之を審確ると、陰と綴繫之いた。そして漸だん與語ふやうになつて里居を詰くと、

「北村だ」

と答言へ、兒に亦、詢ねたので、兒は僞つて、

「山洞なんだ」

と云つた。長鬚が洞居を怪しがると、兒は笑つて、

(七) 胡は狐と同音だから本書中の狐は大概胡姓である。日本で狐の化けた女をおこんさんといふやうなものである。

(八) 沽はおもに酒をうる、酒をかふといふ場合に用ゐられる。杜甫の詩に密沽斗酒諧終宴とある。

「我は世洞府に居んでるんだ。君だつて因否耶の？」
と云つた。其人は益す驚い便、姓氏を詰いた。兒は曰つた、
「我は胡氏(七)の子なんだが、曾か在何處で、君が兩の郎の從をしてるのを見たことがあるよ。顧忘之耶？」
其人は兒を熟審ながら、信じてゐる若でもあり。疑つてゐる若でもあつた。兒は微と下裳を啓げて、少々ばかり假の尾を露して曰つた、
「我輩は混迹人中んでるんだが、但だ此が猶だ存るだけが、爲可恨耳ね」
其人は問いた、
「在市て欲何作つてんだ？」
兒は曰つた、
「父が我を沽ひに遣したんさ」(八)
其人も亦り沽ひにきてゐるんだと告つた。兒が、
「沽たのかい？　未だかい？」
と問くと、
「吾儕は多い貧なんだ故、竊む時が常も多いんだ。」
と曰つた。兒は曰つた、

「此の役は亦良苦さ。耽驚憂からねー」

其人は曰つた、

「受主人遣だから、不得不爾さ！」

因、主人は伊誰かと問ねると、曰つた、

「即、曩か所見つていふ、兩の郎兄弟よ。一は北郭の王氏の婦さんと私てるし、一は東村の某爺さんの家に宿りこんでるんだ。ところが爺さん家の兒といふのが大惡やつで、尾を斷れ、十日ぶりに始と瘥つて、今では復た往つてるのよ」

言つて已ふと、欲別として曰つた、

「我の事の悞をする勿よ」

兒は曰つた、

「竊之のは難しいよ。沽之たはうが易くて不若よ。我が先き沽つて廊下に寄けておいたのがあるから敬以相贈う。或の囊中には尚だ錢が餘つてるから、沽ふのに愁はないんだよ」

其人は無以報いといつて愧さうであつた。兒は曰つた、

「我は本もと同類なのに、何ぜ靳些須にするの？ 暇の時に尚た君と痛に飲まうよ」

遂ら與俱に去つて、酒を授之し乃、歸つたのであつた。

至夜つた。母おやは竟う安らかに寢ることができた。復う奔けだすやうなことはなかつた。

(九) 陳平は漢の丞相で張良と竝び稱せられた智將、ここでは狐退治の正成だといふやうな意味。

異つたことが有つたのを心知し、父おやに告つて同に往つて驗之則、兩ひきの狐が亭の上に斃れ、一ぴきの狐が草の中に死んでゐた。喙から尙だ津々と血が出てゐる。酒瓶が在るので、持つて搖之てみると、酒が未盡つてゐた。父おやが驚いて、何ぜ早く告はなかつたと問くと、兒は曰つた、

「此物は最う靈なやつで一ど洩せ則、彼、すぐ之を知るんですから……」

翁さんは喜んで曰つた、

「我兒は討狐(九)の陳平也」

於是父子は狐を荷いで歸つて來た。見ると一ぴきの狐は尾が禿げてゐて、儼然と刀痕がついてゐた。

自見は遂安かつた。而て婦さんは瘠殊甚たけれど心が漸だん明白してきた。但だ益之嗽くなり、痰を嘔く輙、幾升もでて、尋て卒んでしまつた。

向から狐に崇られてゐた北郭の王氏の婦さんも、至是、問之則、狐は絶なくなつ而、病亦愈つたさうである。

翁さんは由此ら兒の奇てゐるのをしり、騎や射を敎はした。後貴をして總戒になつた。

(一) 列子に太素は質の始とある、又劉守素の著に之を脈すれば人の貴賤夭壽を知るべしとある。

董生

董生は字を遐思といつて青州の西鄙の人であつた。冬月の薄暮のことだつたが、榻に被を展いて熾炭れ、方將篝燈として居る適、友人が招飲によこしたので、扃戸て去ていつた。友人の所に至てみると、一座に太素脈の善な醫人が有て、徧診諸客つたが、末に王九思といふ生と董とを顧てさう曰つた、

「余は多の人を閲ましたが、兩君の如に奇な脈のかたは無ん。貴い脈で而で賤しい兆があるし、壽の脈で而で促の徴があるし、此は鄙人なんかには敢知りません。然而で董さんの方が實く甚いんです」

共なは驚いて問之ねた。醫人は曰つた、

「某も至此ては亦窮於術ので臆んに決ることは未敢せん。願ぞ兩君とも自で愼之なさつてください」

二人は醫人のことばを聞いた初は甚く駭いたのであつたが、既て模稜な語だらうと以爲つ

て置不爲意かつた。

半夜になつて歸つて見ると、書齋の門が虛掩て居たので、大く疑んだけれど、醺中ごころに、これは必と去く時に忙促た故、門を忘扃鍵たのだらうと自憶ひ、そのまま室に入ると、未遑蘇火く、先に手を衾の中に入れて溫かいか否うかを探つた。で、纔一探入る則、膩つこい人が臥て有るので大く愕いて手を斂めた。そして急いで火をつけてみると、竟は韶顏の、稚齒い、神仙にも殊らぬ姝麗であつた。生は狂喜で、戲に下體のはうを探る則、毛だらけの尾が修然について居たので、大く懼れて欲遁としたが、女は已う醒し、手を出して生の臂を促へ、

「君、何へ往つてたんです」

と問いた。董は益す懼れて、戰栗ながら哀求んだ、

「願ぞ仙人憐恕してください！」

女は笑つて曰つた、

「何を見て我を仙人なんていふの？」

董は曰つた、

「我は首を畏れない而ど尾を畏れるんです」

女は又笑ひながら、

(三) 晉皇后傳に贊、芬、實、窈、窕、芳、菲、婉、嫕と、あり、註に、窈、窕、一作、苗、條、とある。

「尾が何に有つて？　君、悞へてるのね」

と曰ひ董の手を引ぱつて強に又探らした。則、髀肉は脂のやうで尻骨は董々かつた。女は笑つて曰つた、

「何如？　醉態朦朧つて何を見たか伊何ないくせに、誣人若此をするのね」

董は固女の麗いのが喜でゐたのだから、至此てくると益す惑ひ、反つて適然之錯を自咎むのであつた。然し所來無因いのを疑はしくおもつてゐると、女は曰つた、

「君、東隣の黄ろい髪の毛の女を憶へてゐない？　屈指へると移居てから已ろ十年よ！

爾時我は未笄で、君は垂髫だつたわ！」

董は恍然曰つた、

「卿は周さんとこの瑣アさんかい？」

女は曰つた、

「是矣！」

董は曰つた、

「卿が言之たので我髣髴、憶ひだしたんだ。十年も見ないうちに、遂う若此に苗條なつたんだね。然かし遽に何んで來たんだい」

女は曰つた、

(三) 卓文君が司馬相如と逃げた前に寡婦になつて居たといふ故事から新らしく寡婦になつた女を文君といふのである。

「妾、癡い郎のとこに適いてね、四五年たつと翁も姑も相繼て逝つたのに、又不幸にも文君になつて、妾一身が賸つちまつたの。(三) 煢ぼつちで倚る所も無いもんだから、孩の時に相識て居るのが惟君だつたのを憶ひだして、故で勉と來相就たのよ。で、門を入ると已り暮れてゐたのに、邀飲が適ど至たもんだから、潜隱て君の歸りを待つてたんだわ。そして待之既て久るうちに足冰肌粟た故、被を借りて自溫つてゐたのさ。幸勿見疑よ」

董は喜んで衣を解いで共に寢んだ。そして意殊自得になつてゐたが、月餘りすると漸羸瘦てきた。家人が怪しんで問ねる輙、自でも知ないと言つてゐた。そのうちに久之たが、面目は益す支離るばかりである。乃、懼ろしくなつて、復た脈の善な醫のところへ造つて診てもらふと、醫は曰つた、

「此れは妖脈だ。前日の死徵が驗れてきたので、疾不可爲也」

董は大そう哭いて去らなかつた。醫は不得已ので、董の爲めに手に鍼をうつたり臍に灸をすえたりした。そして贈以藥て囑曰けた、

「何かに遇つてる如なことがあつたら、力めて之と關係を絶たなければいけませんよ」

董も亦り自で危いとおもつたのであつた。既て歸つてきた。女が笑ひながら要之ると董は怫然つて曰つた、

「勿復相糾纏！　我は行且死なんだ！」

で、顧きもせずに走つてしまつた。女は大そう慚もし亦怒して曰つた、

「汝へ未だ欲生とおもつてるの？」

夜に至ると、董は藥を服んで獨りで寢たのであるが、甫合睫かとおもふまもなく、夢のうちに女と交つた。そして目が醒めると遺らして居た。董は益す恐れて寢を內のはうに移し、妻や子が火をつけて守之つたけれど、夢如故るのであつた。窺いてみると女子は已う失所在つた。

それから數日が積つと、董は一斗餘りも血を嘔いて死んでしまつた。

王九思が書齋の中に居ると、一の女子がやつて來た。王は其美しいのを悅んで私之つたのであるが、詰所自ると女は曰つた、

「妾は遐思の隣なんです。渠は素は妾と善だつたんですが、意外にも狐に惑されて死んでしまつたんです。此輩の妖氣といふものは畏いんですから讀書む人は愼けて相防なければならないわ」

王は女の話を聽いて益す佩之り遂相懽待てゐたのであるが、居數日つと迷罔して病瘠てきた。忽、董が夢にあらはれて曰つた、

「君と好くして居るのは狐なんだ。我を殺して又我友を殺さうと欲てゐるんだ。我は已に諸を冥府に訴へて洩此幽憤をしようとして居るんだ。七日の夜香を室の外で炷きたまへ。忘

(四) 調笑はふざけること。李白の詩に不知誰家子、調笑來相謔とある。

却ては勿いよ」

王は夢が醒めてから異なことだとおもつて、女にさう謂曰た、

「我は病が甚くなつて恐將委溝壑つて居る。或が女に勿室といつたよ」

女は曰つた、

「壽命があれば女を室たつて亦り生きてるんだし、壽命がなければ女を室なくつたつて亦り死ぬわ」

で、そばに座つて(四)ふざけ與調笑るので、王は心不能自持て又亂之た。そして已而から悔之した而ど、絶ることが不能つた。

暮に及つたので、香を戸の上に挿ておくと、女が來て拔棄てしまつた。するとその夜の夢に又董が來て、囑んだとほりにしてくれないのを讓めるのであつた。で、次の夜は暗く家人に囑け、俟寢後ら潛と炷之した。すると榻の上に在た女が、忽ち驚いて曰つた、

「又香を置いたの?」

王は言つた、

「不知よ!」

すると女は急いで起きたが、香を得ると又折つて滅之てしまつた。そして入つてきてさう曰つた、

「誰が君に此んなことを爲せるのよ」
王は曰つた、
「或ん室人が我の病を憂して、巫家のいふことを信じ作厭禳をしてるんだらう！」
女は、それをきくと徬徨不樂やうすをして居た。家人は香の滅えたのを潛り窺て又之を炷くのであつた。女は、忽、歎じて曰つた、
「君は福澤良厚かたです。我が悞い遐思を害して而て子のところへ奔たといふのは誠く我の過でした。我は冥の曹の前で、遐思と質しなければならないんです。如し君が夙好をお忘れにならないのでしたら、我の皮囊を壞らないでくださいね」
で、逡巡ひながら榻を下りたかと思ふと仆地而死んでしまつた。燭で之をみると狐だつた。王は猶だ活きかへりはしないかと恐し、遽いで家人を呼びよせ、革を剝いで懸させたのであつた。
王の病は甚かつた。見ると狐が來て、
「我、冥の法曹に諸を訴へたんです。すると法曹は、董さんは色を見て心を動かしたんだから死ぬのが罪相當だと謂ふんです。但し我も、人を惑すことはならないといふので、金丹を追去られ、復今還生つてきたんです。我の皮囊は何に在ります？」
王は曰つた、

(五) 自分の精氣を以て煉成したもので、道家は之を內丹といひ、金石を煉つてつくつたのを外丹といふ。共に金丹と稱し、仙人になる藥である。元の陳致虛に金丹大要十卷の著がある。

「家人が知らないで已う脱いでしまつたさうだ」

狐は慘然に、

「余、多の人を殺したんですから、今死んでも晩いくらゐです然ど、忍のね、君も！」

と曰つて恨々に去つてしまつた。

王の病は幾危かつたが、半年乃と癒つたのであつた。

陸判

陵陽に朱爾旦字は小明といふ人があつた。豪放な性だつた然ど素が鈍であつたから學雖篤も尙未名を人に知られなかつた。

一日のこと文社が衆つて飲んで居ると或人が朱に向ひ、

「君は豪傑の名があるが、深夜十王殿に赴つて左りの廊下に在る判官の木像を負つて來ることが能たら、衆で醵つて君の爲めに酒莚を開くが何うだ」

といつて戲つた。蓋い陵陽に有る十王殿の神も鬼も皆な以木雕で生きてるやうに粧飾てある中で、東の廡にある判官は綠の面赤い鬚で容貌が尤く獰惡であつた。そして夜になると兩方の廊下で拷訊の聲が聞えることなどあるので、十王殿に入る者は身の毛が森豎くらゐであつた。それで衆がこんなことで朱を難らせようとしたのである。

朱は笑つて起つと逕に出て去つたが居無何、門外で、

「髯宗師を請して來たよ」

と大呼るので、衆が起ち上る俄、陸は判官の木像を負つて入り、それを几の上に置くと觴をとつて三度奉酬た。衆は木像を睹るや否や身體が瑟縮んで座に安んずることが出來ない仍、請負つて去つて吳れと朱に賴んだ、朱は又酒を把つて地に灌ぎ、

「門生は狂率不文ですから、大宗師、諒不爲怪い。荒舍は此の匪遙です。乘興た時には幸ぞ勿爲畦畛飲みに覓つしやい」

と祝つて負つて去つた。

次日は果して衆で朱を招いて飲んだ。抵暮半醉きげんで歸つて來たが興未闌ので挑燭して獨りで飲んでると、忽ち簾を搴げて入つて來た人がある。視之則判官だ。朱は起つて、

「噫！　僕は殆將死矣！　前日威嚴を冒瀆したから今ま加斧鑽に來られたんでせう！」

といふと判官は濃い髯を啓て微笑し、

「非也、昨日高義な相訂を蒙むつたので、今夜は偶ま暇があつたから敬んで達人の約を踐んだのです」

といつた。朱は大に悅び衣を牽いて座を促し、自ら起つて器を滌つたり火を熱したりすると、判官は、

「天道が溫和だから冷飲で可以」

といふ。で、朱は如命に瓶を案の上に置き、奔つて家人にさう告つて肴果を治させた。

(一) 治具とは酒食の具をととのへることである。

(二) 制藝は八股文章をいふ。

(三) 觥とは兕牛の角で作つた大きな盃。

(四) 世説山濤に嵇叔夜といふ人は巖々として孤松の獨立するが如く其醉ふや玉山の將に頽れんとするが如しとあるところから醉つた人を形容するに用ひるのである。

(五) 紅勒とは朱筆で棒を引くこと嘉祐の頃公主の試に一擧人が天地軋、萬物茁、聖人發と書いたのを歐公が見て、これは好んで險怪の語を爲す劉幾だらうと思ひ

妻は聞いて大層駭き、座敷に出る勿と戒めたが朱は聽かない、立つて(一)さけさかな具の治ふのを俟ち、座敷へ出て來て、易琖交酬をしながら始めて姓名を詢ねると、

「僕の姓は陸で名はないよ」

と答へた。與に古典の談をして見ると應答響の如くである。

「(二)制藝を知つて居ますか」

と尋ねると、

「妍媸ぐらゐは亦頗り辨へてるさ。冥司の誦讀は陽世と略ぼ同じだよ」

といふ。陸判官中々の豪飲で一擧に十(三)觥を平らげる。朱は竟日飲み通したので遂には玉山の傾頽くを覺えず、几に伏して醺睡して了つた。醒めた比には殘んの燭が黄昏く、鬼客は已に居なかつた。是からといふものは兩三日に一どは來て交情益々洽ねく、時には、抵足眠つて行くこともあつた。朱が文章の牘稿を見せると陸は之を紅勒して都べて不佳といふのだつた。一夜のことである。朱は醉ぱらつて先に寢て了ひ陸は猶だ獨酌でやつて居た。忽、醉夢の中で臟腑に微し痛みを覺え、眼が醒めて視る則、陸判が牀の前に危座つて朱の腔を破ぶり腸胃を取り出して一條一條整理して居た。朱は愕いて、

「何の仇も怨も無いのに何以僕を殺すんだ」

と尋ねると陸は笑つて、

秀才刺、試官刷と續けて大きな朱筆で抹殺した、それを紅勒帛といつたといふ。

(六)(七) 鄉試の及第者を五經に分ち其首位を魁といふ。

(八) 前項及第者中最優等者を解元といふ經元とは解元の意味。

「勿懼！　僕は君の爲めに慧な心と取易へて居るのだ」

といつて從容に腸を入れて已つて、復た皮を合はせ、末に足を裹む布で朱の腰を束きつけて作用を畢つた。視ると榻の上には血の迹もなく、腹のあたりが少し痲木るやうに覺へる。陸が几の上に一片の肉塊を置いたのを見て、

「何です」

と問ねると、

「此は君の心である。君の作文が不快いのは君の心の毛竅が塞つてゐるためだから、適ど冥間にある千萬の心の中から佳者を一枚撰び出して、君のために取替へ、君の此を留つて闕數なつたのを補充するのさ」

といふ乃、起つて扉を掩て去つて了つた。天明けてから解いて視ると、創の縫ひめは已ふ合がつて縱のやうな赤い痕が存つて居るのみだ。朱は是より文思大に進み眼を過したものは忘れないやうになつたので、數日を過ぎて又文章を出して陸に示ると、

「可矣。但君は福が薄くて大した顯貴は能ない。(六)鄉科までぢや」

「それは何時だらう」

「今歲は必と魁で及第するだらう」(七)

それから幾もなく豫備試驗で冠軍になり秋の闈では果して(八)經元で中した。同社の友達

(九) 揶揄は手を擧げて相弄するなりと集韻に見ゆ、指ざして笑つたりなどすること。

(一〇) 前項の試驗答案は硃と墨とで二通を認め硃の方は無名とし墨の方は記名密封して提出し試驗委員は硃書によつて點數を定めたのち墨書を開いて姓名を發表する。その墨書を闈墨といふのである。

(一一) 鄒陽獄中の書に蟠木の根柢輪囷離奇にして萬乘の器たる者は左右を以て先づ之れが容を爲す云々とある容とは形容のことで遂に紹介することを先容といふやうになつたのである。

は朱が鄉試を受けるなんて飛でもないと(九)揶揄つて居たのであるが、(一〇)闈墨を見ると、相視はせて驚いた。そして細しく訊ね、始めて異なことのあつたのを知つた共のものは朱に(一一)先容を求め陸に納交したいとたのんだ。陸は之を承諾した。そこで衆は大に酒席を設けて陸を待つて居ると(一二)初更の頃陸がやつて來た。赤い髯が生動き眼は烱々として電のやうである。衆は茫然として色を無ひ、齒欲相擊ずだんだんに引去て了つた。朱はそこで陸を携て自分の家に歸つて飲んだが、既醺てから朱はいつた、

「(一三)腸を湔ひ胃を伐ぐの賜を受けたことは多とするが尙一事君を煩はしたいことがある。知らず君は可といふか否といふか」

陸は便と請ぞ命けてくれと曰つた。朱はいつた、

「心や腸が可易るとすれば、面目も亦可更ると想ふんだ。山荆は予と結髮ときからの夫婦なんだが、下體は頗亦惡くないのだ但ど頭面は甚く佳麗いといふ方でない。それで尙くは君の刀斧を煩はし欲と思ふんだ」

陸は笑つて曰つた、

「諾、容徐圖之」

と、それから數日を過ぎ夜半に陸がやつて來て闊を叩いた。朱は急ぎ起つて陸を延入、燭をさしつけた。見ると襟裡に一物いれてゐるので詰ると、

（一二）初更は今の午後八時頃。

（一三）王仁裕は人が腸胃を刮つた夢を見て文思大に進んだといふことが五代史にある。

「これは曩や君が囑んだものだ。物色に艱んで居たが適ど一美人の首が得つたので、敬で君の命を報しにきたのさ」

といふ。朱が撥いて見ると頸の血は尙濕ほつて居た。陸は立て朱を促し、急いで奥に入りたまへ、禽や犬なんかを驚がせては勿らんよ、といつた。朱が夜で戸が扃めてあるのを慮かつて居ると、陸が至て一手で扉を推した。すると扉は自でに闢いた。臥室に入ると夫人は身を側めて眠つて居る。陸は美人の頭を朱に抱へさして置いて韡の中から匕首のやうな白刃を取出し、夫人の頂に按がつて著力れ爪を切るやうに迎刃而解放した。首はコロリと枕の畔に落ちた。急いで朱の抱へて居る美人の頭を取つて夫人の項上に詳審端正合はせ、確かりと按捺つけた已而、枕を肩際に塞がつた。そして朱に命じて夫人の頭を靜かな所に痊めさせて去つて了つた。

朱の妻は眼を醒した。頸の間が微し痲れるやうな氣がする。面頰に甲錯ものがあるから搓つて見る血の片が得た。甚く驚き、婢を呼んで汲盥を持つて來させた。婢は夫人の面が血狼籍になつてるのを見て驚絶した。濯ふと盆の水はまつ赤になつて、首を擧げると面目が全り非つてゐるので又駭極した。夫人も鏡を引つて自分で照して錯愕いたが自分にはさつぱり解らない。所へ朱が入つて來て譯を告したので反覆細視と長い眉は鬢に掩き、笑靨が顴に承て全く畫中の人である。領を解いて驗べて見ると紅い綫がグルリと一周して上と下とは肉

（一四）婚禮の前父親が子に酌をしてやること。

（一五）正月十五月の節。

（一六）漢書に賢を右にし愚を左にし貴を右にし賤を左にすとあるゝ、だから正道は右、邪道は左で妖術などは左道なのである。

の色が判然と異つて居た。

是より先、吳侍御に甚う美くしい女があつたが、結婚の約束をして嫁がぬ前に二度も夫が喪だので、十九になつても未だ醮（一四）をしなかつた。（一五）上元には十王殿に遊びにいつたが、時ら遊びにきた人で甚う混雜してゐた内に無賴之賊があつて女を窺て豔しいとおもひ陰かに居里を訪ねて置き夜に乘じて梯をかけて邸に入つた。そして女の寢門に穴を明け婢の一人を切り殺して女に與淫けと逼つた。女は力一ぱいに拒ぎ聲一ぱいに喊つた。賊は怒つて女をも亦殺した。吳夫人は微かに鬧聲を聞きつけ婢を呼び起して往つて視た。そして尸を見て極く駭ろいた。擧家皆起きて來て、堂上に尸を停き、首を項の側に置き一門で啼いたのである。其夜は終夜紛騰ぎ詰旦てから死骸に著せてある衾を啓ける則、身はあるけれど首がない。侍女を偏く撻つたけれども、

「守の致しかたが不恪かつたのです致葬犬腹」

といふばかりである。そこで侍御は郡に訴へた、郡では嚴重に期限をつけて賊を搜したが三月經つても罪人が得られ弗い。漸に朱の家で首が換つたといふ異を吳公に聞したものがあつたので、吳公は疑がつて媼を遣つて吳の家を探らせた。媼は入つて朱夫人を見ると駭し走いで吳公に斯くと告げた。吳公は女の尸が故のやうに存るのを視て、首だけ生てるのを驚き疑ひ無以自決かつたが、ことによると朱が左道（一六）を以て女を殺したのかも知れないと邪猜

（一七）郷試の及第者其他の有資格者に對する試驗を會試といひ禮部で試行するから禮闈ともいふのである。

したので、往ていつて朱を詰つた。すると朱は、

「室人は夢の中に首を取易へられたので實に何故であるか解らぬのです。それを僕が殺したと仰るのは寃罪です」

と辯解をしたけれど、吳公は信じないで朱を訴へた。朱の家人を收つて鞫べても一く朱の言葉の通りであるから郡守も裁決が不能い。朱は歸つて來て陸に向ひ無事に落著する計を求んだ。陸は、

「難かしいことはない。伊の女に自分で言はせればいいんだ」

と平氣なものである。すると夜吳公の夢に女が現れて、

「兒は蘇溪の楊大年に殺されたので朱孝廉には與はありません。あの人は奥さんが豔でないことを氣にして居たので陸判官が兒の頭を取つて與之易之たのです。詰り兒の身體は死んで頭が生きたやうなものなんです。願朱孝廉に仇をしないやうにして下さい」

といつた。醒てから夫人に告すと、夫人の夢も同じであつた。乃で官にさう言つて訴へ出た。官で問べて見ると果して楊大年といふものがあつた。執へて械めるとたうとう罪に伏した。そこで吳は朱の家に詣き、請んで夫人に見はせてもらつた。そして朱を自分の婿にしたうへ、朱の妻の首と女の體とを合せ葬つた。其後朱は三度（一七）禮闈に應じたけれどもいつも試驗場の規則にふれておひ放されたので仕進の心が灰て了つた。

それから三十年を積た一夕陸が來て、
「君の壽は永いことはないよ」
と告曰た。最期の時を問くともう五日だと對ふ。
「能相救るか、くれ否いか」
といふと、
「惟だ天の命ずる所で人間が何うして能私よう。且達人から觀れば生も死も一つである。必ず生を樂しとすることも死を悲しとすることもない」
朱は以爲然と思つて衣衾や棺椁などを治へ盛裝して沒んだのであつた。翌日夫人が方ど柩に扶つて哭いて居ると朱が外から冉々やつて來た。夫人が懼がると朱は曰つた、
「自分は誠く鬼であるが生きてる時と少しも異はないのだ。寡婦になつた爾や孤兒になつた子供のことを慮ふと戀々さに堪へられないのでやつて來たんだ」
夫人は大そう慟いて涙が膺までも流れた。朱は依々に夫人を慰解めた。夫人は曰つた、
「還魂といふ古說もあります。君も靈があるのになぜ再生きて來ないんです」
朱は曰つた、
「イヤ天の定めた命數に違ふことは不可ない」
夫人は問いた、

「陰司に在て何を務めてゐらつしやるんです」
「陸判官が自分を督案に推薦して呉れて官爵をも授けられ亦無所苦のだ」
夫人が再語さうとすると朱は、
「陸さんが自分と同に來て居るから酒饌の設をしなさい」
と曰つて趨つて出ていつた。夫人は依言に營備た。聞くと室の中では飲んだり笑つたり、豪氣高聲宛も生前の若くであつたが、夜半になつて窺に行くと窅然るやうに逝なつてしまつた。是からは三日に一度ぐらゐは來て時には留宿て繾綣にはなして行くこともあつた。そして家中の事に就ていろいろと經紀つてくれた。息子の緯は方五歳であつたが來る輙、提抱てやつたりなどした。七八つに至る則。燈火の下で讀書きを教へてくれた。緯も亦慧な性で九歳の時には文章を能く作つた。十五で邑痒に入り父の無いといふことを遂に知らなかつた。此からは來るのが漸疎くなつて唯幾日幾月かに至るのみであつたが、一夕來て夫人に曰つた、
「今や卿と永久に訣れる時が來た」
「何へ往しやるのです」
と夫人が問いた。
「天子の命を承つて大華卿となり遠方へ赴任するのである。事務は煩多であり途は遠く

(一八) 車駕の行くに羽儀之を導き護るを鹵簿といふと炙轂子にある。

隔てて居る故ら來ることが不能のだ」

母親と息子は扶て哭いた。すると朱は慰めて、

「イヤ爾なに哭くものでは勿。兒は已成人し家業も尙あ可存活のである。百年も柝れずに居る鸞鳳が豈であらうぞ」

といつて子供を顧み、

「好な人となれよ。父の遺業を墮すのではないぞ。十年後には復一度相見はう」

といつて徑に門を出て去つて了つた。これから遂に絕くなつた。後緯は二十五のときに進士となり、勅命を奉じて西岳を祭る道で華陰を經つて行く折柄輿從を連れ羽葆をさしかけた一行が緯の鹵簿(一八)を馳衝ていつたので訝におもひ、車中の人を審覗ると父であつたから馬を下りて道左に哭き伏して居ると父は輿を停め、

「官聲好いので自分は瞑目して居るぞ」

緯は尙ほ地に伏して起たずに居た。朱は車を促して顧もせず火のやうに馳けて行つたが數武かを去つた時佩びて居た刀を解き人に持たせて遣して贈れた。さうして遙に、

「此刀を佩びて居れば貴をするであらう」

といつた。緯は追從かうとしたけれど、輿從も人馬も飄忽として風の若く瞬息にして見えなくなつた。痛恨良や久しきのち、刀を抽て之を見ると極めて精工なもので、

（一九）遜思邈が盧照鄰に對へた言葉。

「膽（一九）は大ならんことを欲し心は小ならんことを欲す、智は圓ならんことを欲し行は方ならんことを欲す」

と一行の字が鐫つてあつた。緯は後司馬となり沈、潛、沕、渾、深といふ五人の子を生んだ。一夕父が夢に現れて刀は渾に贈るが宜いといつた。從之にしたら渾は仕へて總憲となり政治の聲がたいそうよかつた。

(一) 伴に入るとは童試に及第して秀才となつたといふ意味。

(二) 司馬相如の琴歌に、鳳兮鳳兮歸故鄉遨遊四海兮求其鳳とある。

(三) 舅といふ字は日本では夫の父卽ち禮に所謂婦事舅姑の意味にしか用ひないが支那では母の兄弟卽ち詩の我送舅氏日至渭陽の意味にも用ひる。茲では兄弟の子卽ち母方の從兄弟のことである。

嬰寧

王子服は莒の羅店の人であつた。早く父を喪つて孤となつたが、絕う慧で、十四で泮に入つたほどであつた。母さんが最く愛之がつて、尋常には遊郊野などさせなかつた。蕭氏を聘つて配偶せるつもりであつたのが、未嫁まへに夭した故、求鳳が未だ就ずに居た。

上元の節に會た。(三)舅氏子の吳が邀へに來て同に眺矚したが、村外まで至た方、舅の家の僕が吳を招びに來て連れて去つた。王は遊女が雲の如に居るのを見て興に乘せて獨で遨び步くのであつた。

女郎があつた。婢を携れ一枝の梅花を撚びながら步いて居た。容華は絕代で、笑ふ容子が手にも掬まれるほどであつた。生は注目不移て竟には顧忌れるのさへ忘れて居た。女は數武か過てから婢を顧へつて、

「個の兒郎の目は灼灼して似賊みたいね」

と曰つて花を地上に遺し、笑ひながら去つてしまつた。生は花を拾つたが、悵然と神魂の

(四) 瞳人語の註に在る。

(五) 醮とは僧が壇を設けて祈禱すること、讓とは巫女が巽みを逐ひ祓けること。

喪失た人のやうになつて怏々く返つたのである。

家に至た。生は花を枕の底に藏つて垂頭て睡たまま語もしないし食べもしない。母さんは憂之して(五)醮禳をさせるけれども益々劇くなるばかりで肌革鋭減た。醫師が診視して劑を投て病氣を發表すと、忽々として迷つた若になつた。母さんが所由を撫問くけれど、默然て答もしない。

適ら吳が來た。母さんは吳に密で詰之てくれと囑んだ。吳が榻の前に來ると生は吳を見てほろほろと涙を下した。吳は榻の傍に就つて慰解ながら、漸々致研詰てみると、生は具く事實を吐し、且て謀畫を求むのだつた。吳は笑つて曰つた、

「君も亦復癡げて居るではないか。此な願は有何難遂さ。當い、君に代つて訪之てみよう。徒歩於野をするほどだから必と世家ではあるまい。如しまだ字がしてなければ、固事は諧るし、不然には重な賂を拌れば計ふに必と允遂ふさ。但得痊瘳りたまへ。この事は僕が成功させるから」

と曰つた。生は聞いて不覺解顔したのであつた。

吳は室を出て母さんに告つた。そして女子の居里を物色した。而ど探訪既窮しても並に蹤跡が無いので母さんは大そう憂して無所爲計た。然し吳が去つて後は生の顏色が頓に開なり、食も略々進むのであつた。

(六) 姑は日本では普通しうとめの意味に使つて居るが支那では父の姉妹卽ち父かたのをばといふ場合にも用ひて居る。茲では勿論後者である。

(七) 姨は母の姉妹といふ意と妻の姉妹との兩義がある。ここでは前者に用ひてある。

(八) 後漢袁紹傳に孤客窮軍仰我鼻息とある。ここでは他人の鼻息を仰ぎ窺はなくても可いといふ意味である。

數日の後ち吳が復やつて來た。生が、謀したことは何だらうと問ねると吳は結していつた、

「已得之んだ、僕誰何人と以爲たら、乃は我の姑氏女卽ち君の姨妹行なんだ。今尙聘を待つてるんだから內戚で昏姻をする嫌ひはあるが、實を告へば、諧らないことは無いんだ」

生は善を眉宇に溢れさして問いた、

「何里に居るんだい」

吳は詭て曰つた、

「西南の山の中で去此三十里可なんだ」

生は又再四付囑んだ。吳は銳身自任て去つた。

生は由此飲食が漸々加て日に日に就平復てゆくのであつた。枕の下を探つて視ると花は枯れては居るけれど、未だ凋落てはしまはない。凝と思へては其人を見るやうに把玩んだ。吳が來ないのを怪におもつて折柬で招之けれど吳は用事に託けて不肯赴召た。生は恚怒つて悒悒と歡まない。母さんは復病氣になるだらうと慮つて婚姻の議を急いだ。そして略と與商搉してみる輙、首を搖つて不願だといひ、惟每日吳を待盻て居た。けれど吳は迄に耗をしなかつた。生は益々吳を怨恨んだがやがて轉思した。三十里は遙い道ではない。何に他人を仰息(八)たのまないでもいいト。それで梅の花を袖中に懷れ負氣して出て往つたのを、家の人は知らなか

（九）伶仃は零丁に同じ、俠女の註にある、獨のこと。

（一〇）道が險阻で獸さへ通らぬ、ただ鳥ぐらゐが通ふといふことである。

（一一）本草に鷓鴣生江南鳴曰鉤輈格磔とある又李群玉の詩に正穿屈曲崎嶇又聽鉤輈格磔とある鷓鴣のやうな鳴き聲をいふのである。（別におしやべりのことにも應用する）

つたのである。

（九）伶仃として獨で歩いた。程を問くこともできないから但南山を望て行くのである。約三十里餘りも來ると山は亂れて合沓なり、空をさへぎる翠の色が爽肌で、寂として行く人も無く、止だ鳥の道があるばかりだ。（一〇）遙に谷底を望むと花の叢、樹の亂れの中に、隱々と小里落があつた。山を下りて村に入ると、舍宇は多くも無く、皆な茅屋だけれど甚う修雅だ。北向きの一つの家は門前が皆な絲柳で、牆の内には桃や杏が猶だ繁であつた。そして其の間には修い竹があつて、野鳥が中で格磔と鳴いて居た。

生は園亭だらうと意つたので敢遽には入らなかつた。回顧くと戸の對に巨きな、滑々した、潔かな石があつたので、それに據座つて憩んで居た。俄、牆の内で女子が、

「小榮！」

と長く呼んだ。嬌かしい細い聲であつた。聽てる間に一人の女郎が東の方から西の方へあるきながら、杏の花の一朶を執り、俛首いて簪にしようとした。が、ふと頭を擧げて生を見ると、遂復それを簪にはせずに、含笑して花を撚りながら入つてしまつた。審視之上元の節に途中で所遇た女であつた。心驟喜こんだ但ども、念へると階進が無い。姨氏を呼ばうかとも思つた。而し從で還往をしたことが無いのだから訛誤の懼れがある。といつて門内に問ぬべき人も居ない。仕方がないから朝から日の晷るまで座つたり臥になつたり徘徊たりし

（一三）學問に夢中になつて世事に迂い人のことである。唐の竇威傳には竇氏兄弟皆喜武獨威尚文諸兄詆爲書癡とある。

て盈々望斷ねた、飢渴のさへ忘れて了つたのである。時々女子が半面を露して窺きに來るのが見えた。不去のを訝んでる如に。

忽、一の老嫗が杖に扶つて出て來て生を顧て曰つた、

「何處の郎君です？　聞けば辰時から來て至於今おいでなさるさうじやが、意將何爲です。飢くは得勿んかの？」

生は急に起がつて揖之をして答へた。

「親類を盼うと思つてるんです」

嫗さんは聾瞶るいから聞えなかつた。生は又大きな聲で言之つた。乃と、

「貴戚は何といふ姓です？」

と問ねた。生は答が不能かつた。嫗さんは笑つて曰つた、

「奇哉ね！　姓名をも知らずに何んな親類が探ねらりよう。視うけるところ郎君は書癡のやうじや。不如我に從て來て粗糲でも啖はつしやれ、小な榻でも足臥るのがありますで、明朝歸つて姓氏を詢ね、再來て探訪ても晩くはあるまい」

生は方ど腹が餒て啗べたいと思つて居た所だし、此から漸々麗しい人に近よれるとも考へたので、大そう喜んで嫗さんに從て入つた。見れば門の內は白い砌の路で、紅い花がその道を夾み、片々と階しにも墮ちて居た。西へ曲折つて又一つの闕を啓くと、豆棚や花の架

（一三）禮に客固辭主人肅客而入とある客を進めて入れるのである。

（一四）詩經に終窶且貧とある。窶とは貧乏のために禮儀をも缺くといふことである。

（一五）費冠卿の詩に生計唯餘三尺僮とある。こゝでは俗にいふ男ぎれの意である。

（一六）醮といふ字は酒を供へて神佛を祭るといふ意味にて冠婚の酌といふ場合にも用ひるが、普通女子に對して祝言の盃をしたとかせぬとかいふ時に使つてある場合が多い即ち女未だ醮せずといへば女

が滿庭中である。媼さんは肅客して舍に入つた。（一三）粉壁が鏡のやうに光明り、窓の外の海棠の枝朶が、室の内に探入んで居る。茵藉、几、榻など潔かな澤かなもの罔不であつた。

甫と座る即、有人窓の外から隱約と窺いて居る。媼さんが、

「小榮や、速く黍を作へなさいよ」

といふと外で婢子が嗷聲で應した。座が次つてから具く宗閥を展べると媼さんは、

「郎君の外祖さんは吳姓ではありませんかの？」

と曰つた。

「然です」

と答へた。媼さんは驚いて曰つた、

「吾の甥ぢや！　お前の尊堂は我の妹子ぢや！　年來家が窶貧なのと（一四）三尺男が無いのとで、遂音問も梗塞なり、甥が此許に長成して居るのに、尙だ識らずに居たのぢや！」

生は曰つた、

「此に來たのは姨さんを探しにですよ、恩遽て遂う姓氏を忘れたんです」

媼さんは曰つた、

「老身の姓は秦といつて誕育は無いのだよ。僅た一人弱息が存るけれど、亦り庶産での、その母親が改醮したもので遺して我に鞠養さしてるのじやが、頗亦鈍でない方での。但し敎

は未だ結婚せぬといふことである。

（一七）禮の内則に雛尾不盈握不食とある。

訓は少んが、いつも嬉しげで愁といふことを知らん子じや、少頃來拜識ませう」未幾く婢子が飯を具た。（一七）盈握た雛尾などがついて居る。媼さんが勸餐る。食べて已ふ。婢が來て具を歛める。と、媼さんが、

「寧姑を喚んで來で！」

と曰つた。婢が應をして去つてから良久すると戸の外で隱かに笑ふ聲がした。媼さんが曰つた、

「嬰寧や！　汝の姨兄が此に在ますよ」

戸の外では嗤々笑不已のを婢が推之て入らしたが、猶口を掩うて居るのは笑ひが遏まらないのであらう。媼さんは瞋目んで曰つた、

「有客在つしやるではないか、咤々叱々と何たる景象ぢや」

女は笑ひを忍へて立つた。生が揖之をすると媼さんは曰つた、

「これは王郎といつて汝の姨さんの子じや、一家で尙も不相識に居るとは可笑人ことさの」

生は問いた、

「妹子の年は幾何なんです」

けれど媼さんには能解なかつたので、生が又言ふと女は復た笑ひはじめた。仰視げられぬほどである。

媼さんは生に謂つた、

「私教誨が少いと言つただらうー　此可見也よ。年は已う十六になつてるのに、呆癡で裁で嬰女の如じや」

生は曰つた、

「甥より一つ下ですね」

「阿甥已う十七かい、庚午屬馬ぢやないかの」

生が首應之と、又問いた、

「甥の婦は阿誰じや」

答へて曰つた、

「無之です」

「甥のやうな才貌で何ぜ十七までも猶だ未聘に居るのじや？　嬰寧も亦り無姑家での。極に相匹敵いが惜しいことには內親の嫌ひがありますわい」

生は無語て嬰寧を目注て居た。他瞬をする暇もないのである。婢は女に小語いて云つた、

「目が灼灼してますのね。賊腔がまだ改らないんでせう」

女は又大そう笑つて婢を顧り、

「碧桃が開いたか未だか視て來よう」

と曰つて遽いで起ち、袖で口を掩へつつ細碎蓮歩で出ていつた。そして門外へ出てから聲を縱して笑ふのであつた。

媼さんも起つたが、婢を喚んで生の襆被を安置さして曰つた、

「阿甥、易くは來られないのじやで、三日や五日は留つてゆくが宜い。遲々汝を送つてあげるでの、如し幽悶いのが嫌じやつたら、舍の後にある小さな園が消遣になるし、書もあるで讀むがよい」

次日舍の後に至つて見ると、果して半畝ばかりの園があつた。毛氈を敷いたやうな細い草が一面に生えて楊の花が糝を撒いたやうに徑に溜つて居た。そして三楹の草舍があつて、其所には花の咲いた木が四合つて居た。生は小歩に花を穿つて行くのであつたが、樹の頭で蘇々といふ聲が聞えるので、仰視ると嬰寧が上に在た。生を見ると狂く笑つて欲墮だから生は曰つた、

「勿爾よ、墮るよ」

女は且つ下り且つ笑つた。自分でも笑ひが止まらないのだ。方將地に及ろうとしたとき、失手つて墮ちた。乃、笑ひが止まつたのである。生は女を扶け起したが陰り腕を挿へたので女の笑ひが又作つた。樹に倚りかかつたまま歩くこともできなかつたが、良や久しくしてから罷んだのである。

(一八) 化爲異物とは死して人外の鬼となることである。魏の文帝の書に元瑜長逝、化爲異物とある。

生は女の笑ひが歇まるのを俟ち、袖中の花を出して示之た。女は接之て曰つた、

「枯れてるわ、何で之なものを留とくの？」

「此は上元の節に妹子が遺てたんだから存ておくのさ」

「存とくのは何ういふ意味なの？」

「愛して忘れないことを示すためにさ。上元に相遇てから凝思んで疾になり、自分でも化爲異物かと思つたが、圖らずも見顔色が得たんだよ、幸垂憐憫つておくれ」(一八)

女は曰つた、

「大細事だわ。至戚だから、靳惜まないわよ。待つてらつしやい、兄が行らつしやる時、老奴を喚んで折一巨綑負して送らせるから」

生は曰つた、

「妹子癡んぢやないかい」

女は曰つた、

「何で癡もんですか」

生は曰つた、

「我は花を愛してるんぢやない。花を撚ぶ人を愛してるんだよ」

女は曰つた、

（一九）漢書中山靖王の傳に群臣非有葭孚之親云々とある、葭といふのは蘆、孚といふのは蘆の中にある薄い紙で至つて薄い親類といふ意であるが、ここでは單に親類といふ意味に用ゐてある。

（二〇）瓜葛は蔓が纏ひつくものだから、親戚が蔓のやうにまとふことを譬へたのである。

「葭孚（一九）の情として愛するのは言ふまでもないことだわ」

生は曰つた、

「我の愛といふのは瓜葛愛（二〇）ではない夫妻愛のことだよ」

女は曰つた、

「異ふの？」

「夜共枕席るのさ」

女は俛むいて良久思案して居たが、

「我、不慣與生人睡の」

語未已に婢が潛りやつて來た。生は惶恐て遁去つた。

少時して母さんの所で會つた。母さんが、

「何へ往つて居たんだゑ」

と問ねると女は、

「園の中で共に話して居たんです」

と答へた。媼さんは曰つた、

「飯が熟てから已う久しくなるに、何んな長話があつて乃爾に喞嘸して居たのぢや」

女は曰つた、

「大哥が我と共に寢ようと……」

生は大く窘しがつて目瞪した、女は微笑して止た。幸せにも媼さんには聞えなかつたので猶ほ絮々と究詰るのであつた。生は急いで他の詞で掩之した。因、小語で女を責めると女は曰つた、

「此語を不應說？」

生は曰つた、

「あんなことを語のは人に背くといふもんだよ」

女は曰つた、

「他人に背いても老母には豈も背けないわ。且に寢るのは亦常事だから何にも諱さなくてもいいわ」

生は女の癡してるのを恨に思つたが悟らせる術がなかつた。

食事が方ど竟つたときである。家中人が双の衞を捉つて尋ねて來た。是より先き生の母さんは生を待つて居たけれど久しく歸らないので疑ひはじめた。村中を幾遍も搜覓さしたけれど竟無蹤跡かつた。因、吳のところへ往つて尋ねた。吳は曩に言つたことを憶ひだし、西南の山に往つて覓ねよと敎へた。で、凡と數の村を歷、殆と此まで來たのである。

生は門を出ると適り迎への人に相値たのである。便、入つて媼さんに告づた、且て女と

（二）清異錄に驢一、名衞又名長耳公とある。

偕同に歸りたいといつた。媼さんは喜んで、
「我がさう有志るのは匪伊朝夕ことなのぢや。但ど賤軀は遠渉が不能のじやから甥が妹子を携れて去つて阿姨を識認らしてくれれば大そう好い都合じや」
と曰つて嬰寧を呼んだ。寧は笑ひながらやつて來た。媼さんは曰つた、
「何んな喜しいことがあつて笑ひが輙不輟のだらう。笑はなければ當爲全人じやに」
因、怒之以目で曰つた、
「大哥が汝と同に去かうといふから裝束をなされ」
媼さんは又家人に酒や食を餉さして始、寧を送り出して曰つた、
「姨さんの家は田産充裕で冗人が養へるのじやから彼に到たら且て歸るのでは勿いぞ、小學、詩、禮を心にとめ亦て好く翁や姑に事へなされ、卽で阿姨の煩になつて汝の爲に良い匹を擇んでもらうのじや」
二人は遂に出發した。山の拗みに至て回顧ると、媼さんは猶だ依稀門に倚つて北の方を望めて居た。
家に抵た。母さんは娣麗を睹て驚き、
「誰だい?」
と問ねた。生は對へた、

(三三) 甥の音はサウ又はシヤクヶ日本ではチヒに限り用ひて居るが支那ではメヒにも用ゆるのである。

「姨さんの女です」
母さんは曰つた、
「前に吳郎が兒に言つたのは詐なんだよ。我には姉がないのに何うして甥が得ませう」
で女に問ねると女は曰つた、
「我母さまの出ではありませんの、父さまの氏は秦ですが沒つた時には兒在襁中でしたから記憶ては居ないんです」
母さんは曰つた、
「我の一の姉さんが秦氏に過たのは良確だけれど、殂謝てから已う久しいんだもの、那で復存てるものかね」
因、面龐や贅や贅やを細く詰ねると一々に符合する。母さんは又疑つて曰つた、
「是矣、然ども亡つてから已う多年んだもの、那うしたつて復存てるものかね」
疑に慮つて居る間に吳生が至た、女は避けて室に入つた。吳は故を詢得て久之は惘然して居たが、忽ち曰つた、
「女の名は嬰寧かい？」
生が然之といふと吳は怪事だと極くさう稱つた。名を知つてる所以を問ねると吳は曰つた、

（二三）元史釋老傳に正一天師は漢の張道陵より始まる其後四代の孫を盛といひ信の龍虎山に居る相傳へて三十六代の孫に至り宗演と名づく元十四年に至り世祖既に江南を平らぐるに當つて使を遣はして之を召す至れば則ち待つに客禮を以てし命じて江南の道教を主領せしめ仍ち銀印を賜ふとある。

（二四）全唐詩話に隋帝が虞世南といふ人を召して勅語を書かして居られたら帝の傍らの司花女袁寶兒が世南を注視て居たので、袁寶兒は憨態をして居ることが多いが今は卿を注視て居るのを嘲ふがよいとおつしやつたので世南は學畫鴉黄半未

「秦家の姑さんが去つた後で姑丈さんは鰊居しをして居たが狐に祟れて病瘠て死んだ。其狐が女の子を生んで嬰寧と名け、繃に包んで床の上に臥かしてあるのを、家人は皆な見たさうだ。姑丈が歿んでからも狐は猶だ時々來たが、後ちに天師の符を求つて壁間に黏けたので狐は遂う女を携れて去つてしまつたが、將勿此耶か」

彼此參疑つてると室の中で吃々笑ふ聲が聞えた、それは嬰寧であつたのである。母さんは曰つた、

「此の女も大う憨生ね」（二四）

吳が女に面たいといふので母さんが室に入ると女は猶だ濃く笑つて居て顧もしなかつた。母さんがお出なさいといつて促したので始と極力むで笑ひを忍へた。そして又壁に面つて時を移し、それから出て來た。出て來て纔と一つ展拜をしたかと思ふと飜然して遽いで室に入り放聲大笑つた。滿室の婦女が爲之に粲然たのである。

吳は異を覘極めに往つて就便て執柯にならうといひ村のあつたといふところに尋ねて至つたが、廬舍は全で無く、山花が零落つて居る而已だつた。吳は姑さんの葬處が彷彿遠くないやうに憶ふのであつたが、墳隴が湮沒つて辨識られないので詫嘆んで返つて來た。母さんは女が鬼ではないかと疑はしく思つたので、室に入つて吳の言つたことを告したが、女は略も駭意かなかつた。又家の無いのを弔つたが、亦り殊して悲意みもせず、孜々に憨笑をして

成垂肩韡袖太憨生といつた。

(二五) 一瓢を二つに分ち婿と婦とが各其一片を執つて酒を飲むのが所謂婚禮の杯である、禮に合巹而酳とある。

(二六) 藩溷は廁のこと、晋書に左思門庭藩溷皆著紙筆とある。

(二七) 木香は薔薇のやうな木で四月頃花が咲く清らかな香ひがして花が雪のやうに眞白である。

ゐる而已であつた。衆も莫之測つた。母さんは少女と同に寢させた。昧爽く省問に來た。女紅を操るのが、精巧絶倫であるが但だ善く笑ふのだけは禁之不可止かつた。然ども笑ひようが嫣然で、笑ひ狂つても娟かさを損さなかつた。それで人が皆な樂しく思つて、隣女少婦さんたちは爭ひ承迎へるのであつた。

母さんは吉日を擇んで(二五)合巹をさせようと思ひはするが、鬼物ではないかと恐したので、日中竊と窺いて見るが形影に少しの異りもない。そのうちに日が至た。華やかな粧をさして新嫁の禮を行はした。女は極く笑しがつて俯きも仰むきも能ないので、遂う禮を罷めてしまつた。生は女が憨癡なので房中隱事を漏洩しはしないかと恐れるのであつたが、女は殊に祕密を守つて一語も道はなかつた。母さんが憂したり怒つたりして居る毎に、女が至つて一笑ふとすぐ解つて了ふのであつた。奴婢が過をして鞭楚に遭ふのが恐ろしいと、母さんの所に詣つて共に話をして居て下さいと求む。そして罪を得た婢が投見と恒も免されるのであつた。女は花を愛するのが癖に成つて居た。戚堂を遍ねく物色して。竊に金の釵を典に入れ、佳種を購求めた。數箇月たつた。階砌から、(二六)藩溷から、花ならぬところは無かつた。庭の後の方に一架の木香(二七)があつた、故から西家の隣近くにあつたのである。女は毎も架の上に攀登り、花を摘んでは簪にしたり玩んだりするので母さんが時々遇見ると訶るけれども、女は卒に改めなかつた。

(二八) 續漢書に度尚、爲上虞長政治嚴峻明於疑理朝中謂之神明とある。神の如くに明らかだといつたのである。

(二九) 鶻突とは糊塗のこと

一日西隣りの子が見つけて凝注傾到で居たが女は避れもしないで笑つて居た。西隣りの子は女の意が已う自分に屬つたのだと謂つて心が益す蕩けるのであつた。女は墻の底を指して笑つて下りた。西隣りの子は約束の場處を示したのだと謂つて大そう悅んだ。及昏から往つて見ると女が果して居たので就へて淫なことをした。

ト、錐で刺されるやうな痛さが心まで徹つたので子は大號といつて踣れた。細視るとそれは女では無くて墻の邊に臥れて居た枯木で、接したのは水淋竅であつた。隣の父は聲を聞いて急いで奔けて來て研問たが呻つてるばかりで何とも言はない。妻が來てから始と實のことを告した。火を爇けて竅を燭して見ると、中に巨きな蝎が有た、小さな蟹の如な奴である。翁は木を碎いて蝎を殺し、子を負つて家に至たが、半夜になると尋て卒でしまつた。隣人は生を訟へ、嬰寧が妖異といふことを訐發いた。邑宰は素から生の才能を仰ぎ慕つて篤行の士であることを稔知つて居たから隣の翁が誣訴をしたのだと謂つて將杖責之た。生は翁の爲めに免してやつてくれと乞んだ。それで遂う釋されて歸つたのであつた。

母さんは女に謂た、

「憨狂をするから爾ことになつたんだよ。あたしには早くから過喜而伏憂れて居るのが知つてゐたんだよ。邑宰さん(二八)が神明た方だから幸せと累に不牽たけれど、設(二九)鶻突い官宰だつたら、必と婦女を公堂で質すことに逮たらうよ。そしたら我兒は何顏見戚里いぢ

(三〇) 孝經に卜其宅兆而安厝之とある厝とは置くことであつてここでは合せ葬むるといふ意である。

やないか」

女は正色になつて復と笑ひませんと矢つた。母さんは曰つた、

「笑はない人は罔いさ、但時を知らなければならないよ」

而し女は由是復と笑はなかつた。故逗ても亦り終に笑はなかつたのである。然ど竟日戚しげな容をしたことはなかつた。

一夕生に對つて涕を零した。異におもつて問ねると女は哽咽ながら曰つた、

「曩は相從つて日淺つたので言之たら致駭怪れるだらうと恐して居ましたが、今日では姑さまも郎も皆な過う愛してくださつて無異心んから直にさう言つても或無妨乎とも思ふんですが。妾は本と狐が產んだんですの。母が臨去に妾を鬼の母に託んだので、十年餘り相依り、始と今日の身になつたんです。妾には兄弟も無いので恃みとするのは君ばかりです。老つた母は岑しい、寂しい、山阿に居るんです。憐れとおもつて合厝(三〇)つてくれる人も無く、九泉で悼恨で居るのですから、郎が倘し煩費を不惜いお心なら、地下人の怨恫を消してやつてください。さうしたら女を養る者も不忍溺棄いやうになりませうから」

生は諾之した。然ど墳冢が荒れはてて草の中に迷くなつてやしないかと慮した。女は但だ、

「慮はありません」

（三）冬至から百五日を過きた日に火の氣を絶つて冷めたいものを喰べる、それを寒食といふのである。

と言つた。日を刻めて夫妻は襯を輿せて往つたのである。荒烟錯楚た中で女が墓處だといつて指視したところを掘ると果して媼さんの尸を得た。膚革が猶だ存つて居た。女は尸を撫でて哭哀痛た。そして櫬を舁がして歸つて來ると秦氏の墓を尋ねて合せ葬つた。是夜生は媼さんが來て謝を稱た夢を見た。寤て述之と女は曰つた、

「妾は夜見ましたわ、郎君を驚すなと囑たんです」

生が留めておかなかつたのを恨がると女は、

「彼れは鬼ですから、生きてる人が多居て陽氣の勝つてるところに何で久く居られませう」

と曰つた。そして生が小榮のことを問ると女は曰つた、

「是は亦り狐で。最う點なんですの。狐の母が留しておいて妾の世話を視させたんです。毎う果餌を攝つて來て相哺んでくれたんですから、德之とおもつて常も不去心で居ます。昨母さんに問ねたら已うお嫁之つたと云つて居ました」

是歳からは寒食の節に値ふ毎に夫妻で秦氏の墓に登つて無缺拜掃した。女は逾年子を生んだが在懐抱中から生ぬ人を見ても畏れず、人さへ見れば笑つて大そう母の風があつたと云ふことである。

(一) 禮記の儒行篇に砥礪廉隅といふことが出て居る。廉はかど、隅はすみであるから、砥礪廉隅といふことはかどをとるといふ意味である。ところで此の場合ではかどをとらぬといふことを善意に解し頑固な四角張つた所謂武士的な人といふ意に用ひてある。

(二) 男色女色

(三) 蘭若といふのは寺のことであるが、八釜しくいふと寺といふ字は勅額を賜はつたうへでなければいへぬのであつて、勅額を賜はらぬのは蘭若といふのが本當である。

(四) 把は拇指と人さし指とで握つた太

聶小倩

寧采臣は浙の人であつたが、慷慨にとみ廉隅自ら重しとする立派な人で、常々も人に對つて、

「僕の生平に(一)二つの色はない」

といつて居た。

適、金華といふところに赴つて、北郭の蘭若に(二)旅裝を解いたが、寺中の殿やお塔は大そう壯麗であつたけれど、蓬蒿が人を沒すほどに生ひ茂つて、人の行蹤も如絶であつた。東と西との僧舍は雙の扉空しく掩ひ、人ありとも見えなかつたが、惟南の小舍だけは扃の鍵が新の如であつた。顧れば、本堂の東の隅に(三)拱把の修い竹が植つて居て、其下に巨きな池があつた。そして野藕が已花て居た。寧采臣は其幽香が意に樂つたのと會ら學使が按臨たる爲めに城内の舍價が昂くなつたので此處に留止らうと思ひ、散歩などしつつ僧の歸つて來るのを待つて居た。

さであつて拱とは兩手の拇指及人さし指で卷いた太さである。此の場合では長い竹の太いのや細かいのが一叢あるといふことである。

(五) 六朝時代には各郡縣に僑を置いてあつた謂はば官營宿泊所であつたらう。爾來旅寓のことを僑といふやうになつたのである。

(六) 大きな一尺ばかりの銀の櫛をさした髪のことで、日本で云へば昔しの丸髷のやうなものであらう。

(七) 鮐とは河豚のことである。河豚の背の黑い斑を鮐といふ。ここでは背の丸いと譯しておく。

(八) 龍鐘といふ字

日暮である。僧ではなくて一人の士人が來て南の小舍の扉を啓けた。寧は趨づいて一禮し、さて自分の意を告すと士人は曰つた、

「此間には主人は無いのです。僕も亦り(五)僑居なんですが、斯んな荒落たところで甘ければいらつしやい。旦晩惠敎て戴けば幸甚です」

寧は喜んで牀の代りに藁を籍き板を支へて几とし、久客の計をした。

是夜は月が高く澄んで淸らかな光りが水のやうであつた。二人は膝を促して本堂の廊下に座り、各々姓や字をのべたが、士人は姓は燕字は赤霞だと自言た。寧は試驗を受けに赴く諸生だらうと思つた。聲音が絶と淅の人の類でないから詰之と秦の者ですと言つた。語が甚く樸誠である。既而相對詞竭ので別れを告げて歸つて寢た。けれど寧は新居なので久しく不成寢かつた。聞くと舍の北の方で喁々と話し聲がする。家口のものがゐるやうだ。起きて北の方の壁にある石の窓の下に伏れて徹と窺くと、短い牆(六)の外に小さな院落があつて四十餘の婦と、鞨た緋を著て蓬首に結つた鮐(七)背い龍鐘した媼さんとが月下で偶語して居た。婦は曰つた、

「小倩は何うして久しく來ないんです」

「ハイ、殆好來矣」

婦が又曰つた、

にはいろいろの出處いろいろな說があるが、此場合の龍鐘は廣韻の龍鍾竹名世言龍鐘謂其年老竹之枝葉搖曳不自禁持とある意味のもので、要は年老いて竹のやうにヒョロヒョロして居ることである。

(九) 左傳に禮之加燕好とある燕のやうに打とけて睦じいことだ。

「姥々を怨んでるやうなことを言つてやしませんか」

「聞きませんぢや。但意が蹙々てるやうでの」

婦が曰つた、

「婢子には好相識は不宜ませんね」

言未已に十七八の女子が來た。彷彿艶絕である。媼が笑つて、

「背地不言人の。我等兩人で正いま談起て居るところへ小妖精が迹響もなしに悄と來たのぢや。幸と不訾著短處よ」といつて又「小娘子は端好畫中人ぢやの。老身が男子なら也り魂を被攝て了ふ哩の」

女が曰つた、

「姥々が譽めて下さらなければ、阿誰が譽めてくれませう」

婦人や女子が何を言つてるのやら分らなかつたが、寧は隣の人の眷口達だらうと意つてそれぎり聽かずに寢てしまつた。又許時してから始めて寂りと聲が止んだ。方に睡らうとする

と有人寢所に至たやうである。急に起きて審顧ると北の院にゐた女子である。驚いて問ねる

と女は笑りして、

「いい月夜で寐られませんから(九)燕好てお話し願と思つて參りましたの」

寧は容を正し、

「卿は物議を防ぎ我は人言を畏れねばなりません略と一失足せは廉恥の道は喪ります」
女は曰つた、
「夜分で知つてる者なんかありませんわ」
寧は叱つた、
寧は又咄りつけた。女は逡巡しながら復何とか有詞とするのを、
「速くお去りなさい。不然と南舍の諸生を呼んで知らせますよ」
女は懼れて戸の外へ退いたが復返つて來て一鋌の黄金を褥の上に置いた。寧は掇つて庭墀に擲きつけて曰つた、
「非義の物を入れると僕の嚢橐が汚れる」
女は慚ぢて出ていつた。そして金を拾ひつつ、
「此漢は鐵石こと」
といつた。
詰旦蘭溪の生が一人の僕を携れ試驗を候つためにやつて來て東の廂に寓つたが夜に至て暴かに死んだ。足の心に錐で刺したやうな小さな孔が有つて血が細細し出て居る。俱故が知なかつた。經宿ぎて僕が死んだ。症が亦同じである。向晩燕生が歸つて來たから寧が質之と、燕は魅だらうといつた。寧は元來抗直い人であるからすこしも意に不在かつた。宵分た。女が復來て寧に曰ふには、

「妾は澤山の人を閲ましたが、君のやうな剛腸した方は未有ん。君は實に聖賢です。だから本當の事を申しますが、妾は氏を聶名を小倩といひ、十八のとき殂なつたので此寺の側に葬つて貰ひましたが、妖物の爲めに威脅されて賤しいことに追ひ役れ、嘲顔しく人に向ふのは實に非所樂たまらないんです、もう寺の中に殺す人がないので夜叉が君を殺しに來るかもしれませんよ」

寧は駭いて免がれる計を求めた。女は曰つた、

「燕生と同じ室に居れば免がれます」

問いた、

「何うして燕生を惑はさないんです」

曰つた、

「彼れは奇人ですから敢して近よりません」

問うた、

「何うして人を迷はすのです」

曰つた、

「妾と狎暱人は錐を隱して居て其足を刺します。すると其人は茫つとして迷つて了ふんです。因で血を攝つて妖の飲料に供へます。又金を用ゐることもありますが實は金ではな

くて羅刹鬼の骨なんです。それを留めて置くと人間の心肝を截取つて了ひます。此二つは時と場合によつて用ひます」

寧は感謝して、戒備する時を問ねると、

「明宵です」

と答へた。さうして臨別泣いて曰つた、

「妾は元海に墮ち漂つて岸を求し得ない身の上です。雲に達くやうな郎君の義氣によつてこの苦しみから救はれることが出來るんですから、倘し肯けてくださるのならどうぞ妾の朽骨を囊に入れてお歸りの後ち葬つて安宅せて下さい。(一〇)再造の御恩にも不啻ます」

寧は毅然く諾之して葬つてある所を問ねると、

「梢に烏の巣のある白楊を記取えて居て下さい」

と言ひ已り門を出て紛然滅くなつた。

明日は燕生に他出をされてはならぬといふので、早くから詣ていつて邀致し、辰後になると酒饌をとゝのへ意を留て燕のやうすを察てゐた。そして同宿の約束をすると燕は、

「僕は耽寂にしてゐるのが癖になつてるんだから」

といつて辭つた。けれども寧は聽かない。强に寢具を移んできたので燕も不得止に從之して榻を移した。そして曰つた、

(一〇) 再生と同じ意味である。

（一）一更は午後の七時より、二更は九時より、三更は十一時頃より四更は午前一時頃より五更は午前三時頃より。

「僕は君が丈夫な人であることを知つて良切に傾しく思つて居る。微し衷へがあるけれど今遽に足下に白すことは出來ない。幸ぞ篋や襆を翻窺ないやうにしてくれたまへ。違之と兩人の不利益になるから」

寧は謹んで受敎した。

既而各々寢ることになり、燕は篋を窓にのせて枕に就いたが移時すると雷のやうな鼾をはじめた。寧は寢れない。（二）一更近いころ窓の外に隱々と人影がした。ト、窓に近よつて中を來窺いた。眼の光りが睒閃と物凄い。寧は懼れて燕生を呼起さうとした時、忽ち篋を破つて出た物がある。練のやうに輝いたかと思ふと石の欞を折り。欻然と一射つた。そして又遽ち斂つて篋に入つた。其速いことは宛も電の滅するが如くであつた。燕は覺て起きた。寧は僞睡をして覘つて居ると燕は篋を捧つて一物檢出し月にすかして臭ひを嗅いだ。白い光が晶瑩する。長さは二寸許り、徑は韮の葉ぐらゐのものである。已而數重にも包んで仍て破れた篋の中に置め、

「何といふ魅なんだらう。大膽な奴だ、篋を壞らすとは」

と自語を曰つて復臥になつた。寧は太く奇だと思つた因起きて問ねた。且て見て居たことを告した。燕は曰つた、

「お互に知愛た仲だから隱しはしないが僕は劍客なんだ。若し石の欞がなかつたら妖は

(一二) 趣はここではシュではなくサクとよむ。促すといふ意味で禮記に乃趣刑獄とあるのがそれである。

(一三) 昔し黄帝の子の祖といふ人は遊んで歩るくことの好きな人であつたが、たうとう道中で死んでしまつたので旅行をする人は門を出るまへに郊野を祭りそれから出發する慣習が生じて來た。それを簡單に祖といふやうになつたのである。

立ころに斃れたらうに。雖然傷は負つたよ」

「所縅のは何です」

と問ねると、

「劍だ。適嗅で見たら妖の氣がある」

と曰ふ。寧が欲觀といふと出して見せてくれた。熒然た一ふりの小劍である。於是益々燕を重んじた。明日窓の外を調べると血の蹟があつた。寺の北の方へ出ると荒れた坟が累々として居た。そして白楊があつて烏が其の顚に巣つて居た。營謀が既就だので趣裝をして歸らうとすると燕生は祖帳を設けてくれた。情義の殷渥いものである。そして破れた革の囊を寧に贈つて曰つた、

「此は劍の袋で、寶藏ておけば魑魅が近よらんよ」

寧が燕に從ひ術を授けて貰ひたいといふと、

「君は信義に富んだ剛直い人だから此術を爲ぶことが可以るけれども君は猶富貴の人で道の人ではない」

といつた。寧は乃で妹が此に葬つてあるからといつて女の骨を掘り出し、衣衾の中に斂れ船を賃つて家に歸つた。寧の齋は野に臨んで居た因齋の外に墳を營へて女の骨を葬り祭祝つて曰ふのだつた、

(一四) 昔しは建築の技術も不充分であつたし農民の生活も單純であつたので百姓などは大概圓るい小家を建てて住んで居た。それが遠方から見ると丁度蝸牛の殼のやうに見えたので小さな家のことを蝸居といひ今になつてもその字を用ひて居るのである。

卿の孤魂を憐れみ
歌哭相聞こゆ
一甌漿水飲
幸に嫌ふことを爲さゞれ

葬つて蝸居(一四)に近し
庶くは雄鬼に陵されざれ
殊に清旨からざれども

祝り畢つて返つて來ると有人後で呼んだ、

「緩待ください。同に行きますから」

回顧るとそれは小倩であつた。歡喜で、

「君の信義は十たび死んでも報いられないわ。一緒に歸つて姑嫜にも拜識り、滕御つて頂けば無悔よ」

といふ。審諦ると肌映流霞、足翹細荀、白晝の端相の嬌豔さは世にありとしも思はれなかつた。それで一緒に齋に歸り、

「座つて少し待つておいで」

と囑けて自分は先きに入つて母さんにさう曰た。母さんは愕然た。時から寧の妻は久しく病氣であつたので母さんが、

「あれに言して驚駭してはいけないよ」

と言次うちに女は已翻然と入つて來て拜伏地下た。寧は曰つた、

「此が小倩でございます」

で、母さんが驚いて顧へる暇もなく女は母さんに曰つた、

「兒は飄然一身で父母や兄弟に遠かり公子から蒙露覆澤被髪膚けたのですから、執箕帚で以報高義をしたいと存じます。」

母さんは綽約な可愛らしい姿を見て始敢言つた、

「小娘子が吾兒を惠顧さるのは大そう嬉しいことですけれど、止一人の兒で用承祧緒せるのですから鬼を偶にする譯にはいきません」

女は曰つた、

「兒には實く二心がないんですけれど泉下人で老母に信ぜられないのは仕方がありません。兄さまとして依高堂て晨昏奉へたいと存じますが如何でございませう」

母さんはその誠を憐れに思つて允してくれた。女は卽で嫂さまに欲拜りませうといつたけれど母さんが以疾といつて辭つたので止たのである。女は卽厨下にいつて母さんの代り(一五)に尸甕をはじめたが入房穿戸が熟居れた人のやうであつた。日が暮れると母さんは畏懼之り歸つてお寢みといつたばかりで牀褥は設らへてやらなかつた。女は母さんの意を窺知て出て いつた。齋の前を過つた。欲入郤退て戸の外で徘徊して居るのが何やら懼がつて居るやうに見える。生が呼ぶと女は曰つた、

(一五) 詩の小雅に有母之尸甕とある。尸は主さどること、甕は食物を熟することである。

「お室の劍氣が畏人の。向か途中で奉見らなかつたのもそのためよ」
寧は已に革の嚢のためだと悟つて居たので嚢をとつて他の室に懸けた。女は乃で入つて來て燈の下に座つた。時が移ぎた。殊に一語も言はない。やや久しく斯んな風であつた後ち、
「夜何か讀むかえ」
と問と、
「妾小さいころ楞嚴經を誦んだんですが今では强半遺忘れて了ひました。浼せんが一卷求いて夜分暇なとき兄に正して頂きたいわ」
寧は諾之した。又座つて默然て居る。二更も盡きようとしたが不自去い。寧が促すと愀然に曰つた、
「知らない土地に孤魂で居るのさへいやですのに殊く荒れたお墓だから怯いわ」
寧が曰つた、
「齋の中には別に牀寢もないし且に兄妹だつても遠れるやうに注意しなければならないから」
女は起つと、容顰蹙而欲啼ながら足倨儴而懶歩で從容に門を出た。そして階を渉つて沒くなつた。寧は竊かに憐んで別の榻に留宿てやらうとも思ふのであつたが、又母さんが嗔るだらうと思ひかへして止たのであつた。

（二六）封誥といふのは夫の功によつて妻に位を與へられ或は父母にさへも及ぶことがあるそのことをいふので、泉壤といふのは九泉の下といふ意味で死んだ自分を輝かすといふことである。

女は毎朝母さんの所へ朝つて捧匝沃盥りそれから堂を下つて操作た。母さんの志ふ様に無不曲承つた。黄昏になると退を告げて寧の齋に來た。そして燭の下で經を誦し、寧が寢ようとする様子に覺くと始めて慘然に去くのであつた。先是寧の妻は病氣でやくにたたなくなつたので母さんの劬は堪へられぬほどであつたが女が來てからは大そう逸になつた。それで心の中では德之と思つて居た。毎日漸々稔んで己の出だ子のやうに親愛がり竟には鬼のひとであることさへ忘れて了つた。そして晩に去らせるのに忍びないので留らして起臥を與にした。女は來た當座飲食をしなかつたが半年ほどすると稀飽を啜るやうになつた。母子とも溺愛之がつて鬼のひとであると言ふことを諱つたし人も亦不之辨つた。無何寧の妻が死んだ。母さんは陰かに女を納れようといふ氣があつたけれど子の不利といふことを恐れて居た。女は微窺ひ當つたので乘閑母さんにさう告た。

「一年餘りになりますから私しの肝鬲もお分りになりましたでせう。行人に禍をするのが不欲ですから郎君に從いて參つたので、區々も他意はないんです。止公子の光明磊落を天人ともに欽瞻つてゐるんですから、三ねんか五年も依賛をして借によつて封誥（二六）を博け、泉壤にほまれを光やかさうと思つて居るんでございます」

母さんも惡い女でないことは知つて居た。但だ不能延宗嗣るといふことを懼れるのであつた。女は曰つた、

「子女は天が授けるんですわ。郎君は註福藉(一七)で亢宗な子供が三人はあることになつて居て。あのよのものが妻であつても、それを奪すことは出來ませんのよ」

母さんは信じた。そして寧に議した。寧も喜んで早速婚禮の莚を列ね戚黨を集めて披露をした。或人が新婦を覿せてくれといつたので、女は慨然といと華やかに妝つて出て來た。一堂の人々は盡く眙めた。あの世の人と疑ふものはなくて反て仙女ではないかと疑つたのである。是より五黨諸内眷は咸な贄を持つて賀に來て爭つて拜識のであつた。女は蘭と梅とを畫くことが善であつたから、尺幅を酬答にしたが、それを得た人々は光榮として什襲に藏つて置いた。

一日のことである。窓の前に俛頸て怊悵若失した居たが、忽に、

「革の囊は何處に在りますか」

と問く、

「卿が畏がるから緘をして他所に置いてあるよ」

「妾は已久しく生氣を受けて居ますから畏くはありません。持つて來て牀頭に挂けて置きませう」

寧が詰其意くと、

「此三日以來心怔忡無停息んの。きつと金華の妖物が妾が遠方に遁たのを恨んで旦晩尋ね

(一七) 左傳に吉、不能亢身焉能亢宗とあ亢は蔽ふの意で茲では先祖をかがやかす樣な子供といふのである。

(一八) 昔し宋に闞子といふ男があつた。梧臺の東で石を拾つて來たが寶石だと思ひ十重の櫃に入れ十襲れの布で包んで大事にして居た。それから大事に藏つておくことを什襲といふのである。

て及るんだらうと意ふんです」

寧はそれで革の嚢を携て來た。女は反覆して視て曰つた、

「この劍は仙將が人を盛つたものです。こんなに敝敗れる迄には幾何許人を殺したか知れません。今日視てさへ肌猶粟悚しますわ」

乃で嚢を牀頭に懸けたが、次日又戸の上に移さした。夜になると燭に對して座り、寧にも寢てはいけないといつた。欻、有一物飛鳥のやうに墮ちて來た。女は驚いて幕の間に匿れた。寧が視ると夜叉の如な狀の物で、電の目、血の口、睒閃と攫拏る勢で前んで來たが、門の所で郤歩つた。そして久しく逡巡つた後ち漸々と革の嚢に近づいて尖い爪で摘み取り、將に爪裂かうとした。ト、忽ち嚢に格然たる響きがあつて、簀を合した位の大きさとなつた。鬼のやうなものが恍惚と半身を現はし、夜叉を揪めて入つて了つた。あとは寂然として嚢も故のやうに縮まつた。寧は駭き怪しんだ。女も出て來て無羔矣と曰つて大そう喜んだ。一緒に嚢の中を見ると數斗の清水があるばかりであつた。數年の後寧は果して進士となり一人の男子を設けた。妾を納れてから又二人とも一人づつ男を生んだが後ち皆んな仕官して有聲がよかつた。

(一) 人畜は車の輪が廻はるやうに生き代はり死に代りするといふのである。心地觀經に有惟輪廻生六道猶如車輪無終始或爲父母爲男女生々世々互有恩とある。

(二) 此揚合特にカザと譯しておく。

水莽草

水莽といふのは毒草である。葛に似た蔓生で、扁豆のやうな紫の花が咲き、誤つて之を食ふと、立に死ん卽、水莽鬼となる。俗でいひ傳へるところでは、此の鬼は輕廻ことが不得い。必再水莽草の毒で死んだ者が有らねばならぬ。そのとき始と之に代るのである。以故楚の桃花江一帶の地には此の鬼が尤う多いと云ふことである。

楚の國の人は同歲の生れを同年といひ、投刺相謁に行く。そして庚兄庚弟と呼び合ひ、子姪は庚伯さんと呼ふ。習俗然也なのである。

祝といふ生が有つた。同年の某の家に造く中途で燥渴いて思飲くなつた。俄、道旁に一の媼さんが棚を張けて飲の施をして居た。祝は之へ趨んだ。媼さんは承迎入棚れて甚う殷に飲を給奉した。けれども之を嗅いでみると、異な味がして茶茗の類でなかつたから、下に置いて飲まなかつた。そして起ちあがつて外へ出た。すると媼さんは急いで引き止め、

「三娘や！　好いお茶を一杯將つてお來！」

(三) 亡くなつた父をいふのであるから、なきちちと譯すべきであるが、口調が惡るいからチヽとしておく。

とさういつた。俄、少女がお茶を捧つて棚の後から出て來た。年は約十四五でもあらうか、姿容が絶う艶かしくて、指環や臂釧が晶瑩鑑影して居る。生は琖を受取つたばかりでも う神馳くなるやうに思つた。其の茶を嗅ぐと芳烈無倫かつたから、一いきに吸んで盡つて再た索いといつた。そして媼さんが出てゆくのを覷して戯に少女の纖かな腕を捉へ、指環を一枚脱きとつた。女は頰を赧めて微笑した。生は益々惑つて門戸を詰ねると女は曰つた、

「郎、暮來しやいな、妾猶り此に在ますわ」

生は一撮のお茶の葉を求らひ、指環と竝に藏ひこんでたち去つた。

同年の某の家に至くと、覺心頭作惡つてきた。お茶が心もちを惡くするの疑とおもつて以情告すと、某は駭いて曰つた、

「殆矣！ (三) 先君は死於是んだ！ 是や不可救！ 且爲奈何！」

生は大そう懼し、茶を出して之を驗ると、眞く水莽草であつた。生は又指環を出して女子の情狀を述すと、某は懸想へて、

「之は必と寇の三娘だ」

と曰つた。生は其の名が確と符て居るので、何故知つてるのかと問ねると、某は曰つた、

「南村の富室の冠氏の女は、夙から豔いといふ名であつたが、數年か前に誤つて水莽を食つて死んでしまつた。必と此が魅んだらう。受魅ひとが若し鬼の姓氏を知ること

(四) 衞の太子共伯の死後其妻の共姜が操を守つてゐるのを父母は强ひて再緣させようとしたが共姜は柏舟の詩をつくつて志を述べ節を屈しなかつた、で寡婦の守節を柏舟といふのである。

(五) 陸判の注に在る。

ができたら、其まうじやの故い襠を求つて煮じて服むと、痊るといふことを或が言つた」

某は急いで寇の所へ詣けた。そして實告以情け、長跪いて哀懇うた。けれども寇は生が死で女に代るんだと思つた故、靳で不與かつた。某は忿つて返つてきて生に告つた。生も亦り切齒をして恨之り、

「我は死んでも、必たつて彼女を脫生はしない」

と曰つた。某は舁して送つていつた。家門に至かうとするときに卒つた。母さんは號涕てのべ送りをした。

生には一の子が遺つて居て、甫周歲であつた。妻は柏舟節を守ることが不能に半年ばかり(五)で改醮した。母さんは孤を留されて哺まねばならなかつた。その劬瘁の不堪に、朝夕悲み啼いて居た。一日も方ど兒を抱いて室の中で哭いて居ると、生が悄然忽入つて來た。母さんは大そう駭き、揮涙に問之と生は答へて曰つた、

「兒地下で母さんのお哭きになるのを聞くと、甚く愴於懷くてこらへられません。故、來奉晨昏のです。それに兒は死はしましたけれど、已う家室も有るんです卽、母さんの勞の分をさせようとおもつて同に來りました。母さん！ お悲きなさいます勿！」

母は問ねた、

「兒の婦といふのは何人だい？」

生は曰つた、

「寇氏は座聽兒死にしましたから、兒は甚う之を恨くおもひ、死んで後、三娘を尋ね出さうとしました。而ども其の居處が不知んでした。すると近ろ某る庚の伯さんに遇つて始つと相指示てもらひました。兒はすぐに往りました。則と三娘は已う侍郎のお役をして居る任といふ人の家に投生てゐました。兒は馳けて去て强に捉之來ました。今では兒の婦なんですが、亦相得つて、頗無苦にくらして居ます」

移時すると門戸から華な妝をした豔麗い一の女子が入つて來て、伏地して母さんに拜をした。生は曰つた、

「此が寇の三娘なんです」

生きてる人では非いのだけれど、母さんは之を視ると情懷が差や慰められた。生は、便、三娘に操作かした。三娘は雅い仕事習慣ては居なかつた然ども、承順で殊う憐人つた。由此は故の室に居て遂う留不去つたのである。

女は諸を其家に告つて請と母さんにたのんだ。生は勿告はうがいいと意ふのであつた而れど、母さんは女の承意になつて卒う告之つた。寇家の翁媼はそれを聞くと大そう駭いて、車を命け、疾に至て視之と果して三娘であつたから、相向はせたまま失聲して哭くのを、女は之を勸止るのであつた。

媼をやが生の家の良う貧なのを視て、甚く憂悼しがると女は曰つた、
「人已鬼つたんですもの。又何厭貧せんわ。且、郎や母さまの情義拳々のを祝んでくださいまし。兒固已之で安心して居ますわ」
因、
「茶をだした媼さんは誰なの」
と問ねると、
「彼は倪つて姓のひとなんですが、自では行かゝりの人を惑すことが不能いとおもつて、故で兒に助けて求つてたのみましたの。今では已う郡城の賣漿者之家に生れていきました」
因、生を顧て曰つた、
「既は婿さんですわ、而でゐて岳に拜をなさらないんですの？
妾復何心だとおもつてらしつて？」
生は乃で投拜をした。女は、便と厨下に入り、母さんに代つて執炊をして翁媼をもてなした。媼さんは之を視て悽心り、既歸と卽に兩の婢を遣して女のために服役せ、百斤の金と數十匹の布帛とを送け、酒や胾を不時ごとに餽送つてよこすのだつた。
寇は時々女を招んで歸寧をさせたが女は幾日かたつ輙、さう曰つた、
「家中は無人ですから早く兒を還してください」

(六)楚辭大招篇に夏屋廣大とあり詩の秦風權輿篇には於我乎夏屋渠々とある。鄭氏は夏屋を大具と解し王肅は大屋と解して居る。大屋の義ともなり禮物大に具はつた有樣ともなる。ここでは勿論大屋の義である。

或、故と稽めておく則、飄然と自分で歸つていつた。翁は、乃で生の代りに(六)りつばないへに夏屋を起ててやつた。それは營備臻至たものであつた。然ども生は終未嘗翁の家に至たことがなかつた。

一日村中に水莽草の毒に中つた者があつたが、一旦は死んだけれどまた甦へつたので、異なことだと相傳になつた。すると生は曰つた、

「是は我が活之てやつたんです。彼のひとは李九といふ鬼に害れたのを我が彼のひとのために鬼を驅去之やつたんです」

すると母さんは曰つた、

「汝、何ぜ不取人以自代の?」

生は曰つた、

「兒は、深く此等輩を恨んでるので、方將盡り驅除つてしまはうとおもつてるくらゐなんです。何で此なことが屑爲う。且に兒はかうして母さんに事へて居られるのが最樂しいんですから、生れ代らうとは不願ん」

由是は水莽の毒に中つたものが、往々豐な筵をこしらへて生の庭に來てお禱りをした。輙とかならず效が有つた。

十年餘り積つと、母さんが死つた。生夫婦は哀毀んだ但ど、見舞の客には對ずに。

(七)禮の檀弓に擗、踊、哀、之、至、也とある。心を附つのが擗、跳躍するのが踊、哀しみに堪へず狂ひ廻る意味の禮である。

(八)殤といふのはわかじにのことで、十六から十九の間に死ぬのを長殤といひ、十二から十五を中殤、八つから十一を下殤、七つ以下を無服殤といふのである。

唯だ兒に縗麻や(七)擗踊の禮義を教へるだけであつた。

母さんを葬つてから又二年餘りして、兒のために婦を娶つた。それは任侍郎の孫女であつた。是より先のことである。任といふ公の妾が女を生んだが、僅か數箇月生きて居たばかりで(八)殤んでしまつた。その後、祝の女にかういふ異なことがあるといふのを聞いて、祝の家に命駕て、翁婿の交りを訂んだ。至是、遂う孫女を祝の子に妻し、往來不絶をするのであつた。

一日祝は子にさう謂つた、

「上帝は、我が人世に功があつたといふので四瀆牧龍君といふ神さまにしてくださつたから、今行矣！」

俄、庭に黄ろい幨の車を駕た四の馬が見れた。馬の四股には皆な鱗甲が生えて居た。祝夫婦は盛な裝をして出て來て同に一つの輿に登つた。子及婦とは泣いて拜をして居た。夫婦は瞬息にして渺くなつた。

是日である。寇の家には女が來て翁媼に泣別をした。亦り生の言つた如なことをいつたのである。媼おやは泣いて挽留めた。すると女は曰つた、

「祝郎が先きに去になつてるんですから……」

で、門を出ると遂不復見なつてしまつた。其子は名を鶚といひ、字を離塵といふのであつたが、寇翁に請んで三娘の體骨をもらひ、生のと與に合せ葬つたさうである。

鳳陽士人

鳳陽の一士人が負笈遠遊にいつた。出るとき妻にむかつて、

「半年したら歸つてくるよ」

と曰つたのであつたが、十月餘りたつたけれど竟う耗問がなかつた。妻は翹盻纂切た。一夜のことであつた。纔と枕には就いたけれど、月あかりで紾にうつるものの影がゆらゆらと搖らめくのを見ると、夫に離れて居る愁い思ひが縈懷になるのであつた。方、反側をしてゐる間、珠でかざつた鬟に、絳い帔をきた一りの麗しい人が、帷を搴げて入つて來た。そして笑ひながら、

「姉、郎君に得無欲見乎？」

と問いた。妻は急に起きあがつて應之した。麗しい人は會してやるから邀與共往かうといつた。妻が修阻を憚すると麗しい人は、

(一)楚辭九辨に圓鑿而方柄兮吾固知其鉏鋙而難入とある。圓い穴に角な柄をすげようとしても旨く入らぬといふのだ。不鑿柄とあればキツチリ入つたことになる。

「但請勿慮」

といつ即、女の手を挽いておもてに出た。そして月色を踏んで並んであるいた。

約一矢遠をいつたやうに覺つたが、麗しい人はひどく行迅速であるのに、女は履で歩き難澁かつたから、麗しい人を呼びとめて少し待たせ、歸つて複履を著てこようとした。すると麗しい人は女を路側に坐らせ、自分の履を脱いで相假をしてくれた。女は喜んで之を著くと、幸に不鑿柄だ。そこで復起ちあがつて從いて行つた。こんどは飛ぶやうに健歩ける。移時すると士人が白い騾に跨つて來るのにあつた。士人は妻を見て大そう驚き、急いで騾から下騎て、

「何へ往くんだ」

と問いた。女は曰つた、

「將以探君によ」

士人は又問いた、

「アノ麗しい人は伊誰だい」

女が未答いうちに、麗しい人は口を掩つて笑ひながら曰つた、

「且勿問訊つてもいいわ。娘子が奔波ていらしツたのも匪易だし、郎君だつて星馳夜半をなすつて、人畜も想當俱殆でせう。妾人家は不遠だから、且息駕なさいな。そして早旦而

(二) 六尺を一歩といひ半歩を一武といふ。

(三) 裴度の酬張祕書寄馬詩に代歩本慙非逸足とある。歩みに代ふるといふ意味である。

(四) 史記淳于髡傳に男女同席履舄交錯とある男女の足がいりみだれてゐること。

行っても晩かないわ」

顧ると數武之外に村落があるので、同に行くと、一る庭院に入つた。

麗しい人は睡て居た婢を起して客に茶など供させ、

「今夜は月色皎然だから燭をつけなくつてもよござんすわね。小さな臺にむかひながら石の榻に坐つてお話をするのも趣があるわ」

と曰つた。士人は蹇を擔さきの梧に繋い乃、座に卽いた。麗しい人は曰つた。

「履が大きくて不適於體たでせう？　途中で頗く累贅んぢや否つて？　歸りには代歩があるんだから乞賜還也ね」

女は稱謝つて之を付した。

俄頃に酒や果の設ができた。麗しい人は酒を酌で、

「鸞鳳が久しく乖れていらしッて圓在今夕におなりなんだから濁醪ですけれど一觴敬以爲賀しますわ」

と曰つた。

士人は琖を就つてそれに酬答へた。かくて主も客も笑ひながら言をし、(四)履舄交錯れて樂しむのであつた。が、士人は麗しい人ばかり注目め、屢び以遊詞いつて相桃ひ、夫妻が久しぶりで聚つたのに並う不寒喧一語かつたし、麗しい人も美目流情つて妖言隱謎ばかりかける

(五) 磕牙とは齒をがちがちやること即ちしやべること。

(六) 西廂記に望、穿、他、盈々、秋水とある望穿は凝望すること、秋水は明眸。

(七) 夫が外出した場合はいて居る履でトなふ、仰けば歸る、俯けば歸らぬ、此のトひを占鬼卦といふと春閨秘戯にある。俗にしたがひ疊算と譯しておいた。

ので、女は惟だ默つて坐つて居た。

久之に漸々酒が酣んできて二人の語は益〻親なれしくなつた。麗しい人は又に巨な觥で客に勸めた。士人が醉つたからといつて辭ると勸之益苦めた。士人は笑つて曰つた、

「卿が僕の爲に一曲度れ卽、當飲よ」

麗しい人は拒まなかつた。牙の板で提琴を撫いて歌つた。

黄昏卸得殘妝罷
窓外西風冷透紗
聽蕉聲
一陣一陣細雨
(五)何處與人閑磕牙
(六)望穿秋水
不見還家
潸淚似麻
又是想他又是恨
(七)手拿紅繡罪兒占鬼封

歌つて竟ふと笑ひながら曰つた、

(八) 史記の殷本記に紂使涓作淫聲北里之舞靡靡之樂とある。隨順の意、細好の聲であるからここではあまつたるいと譯しておいた。

(九) 塊然は孑然に同じ、獨りぼつちのことである。

「市井里巷之謠で、不足君聽なないんだ然ど、因流俗所尙ら姑と効顰たのよ」、その靡々い音聲と狎褻しい風度に、士人は搖惑つて若不自禁つてゐた。少間して麗しい人が僞睡をして席を離れると、士人も起つて從之而去つたきり、久之かへつて不至い。婢子は乏疲て廊に伏睡したままである。

女は塊(八)然(九)と侶も無く、ただ獨りで坐つて居たが、中心憤恚て頗難自堪ので、遁げて歸らうと思つた而ど、夜色微茫で道路を憶えて居なかつた。輾轉無以自主い因、起あがつて覘之と、裁は其の窓の近くであつた。斷雲零雨之聲が隱約可聞え、又て聽いて居ると、良人は與己の素常の猥褻さへ盡情傾吐てゐるのだつた。女は手が擅へ心が搖ついて不可遏られない殆であつた。不如のこと出門て竄溝壑以死と念つて、憤然しながら歩いて行くと、弟の三郎が馬に乘つて至るのにであつた。三郎は遽便馬から下て問いた。女は具くわけを告した。三郎は大く怒つて立ぐ姉と與に庭院に回つて家のなかに入る則、室門扉閉つて、枕上之語が喁々と聞えて居た。三郎は斗の如な巨な石を拋げつけた。窓の欞が三五本ばらばら碎斷れた。

と、內で大聲に叫んだ、

「郎君の腦が破けたわ！　奈何しよう！」

女は之を聞くと愕然して大哭した。そして弟に曰つた、

「我し郎君を殺せつて汝に謀したんぢやないぢやないか！　今且如何？」

三郎は目を擽つて、

「汝が嗚々にして私をつれて來たんじやないか。そして甫と能消此心中惡と、こんどは又男兒のひいきをして弟兄を怨むんだね。我は不慣與婢子供指使よ」

と曰つて身を返へして去かうとした。女は三郎の衣を牽きとめて曰つた、

「汝我を連れて去かないのかい？　將何之つてんだい？」

三郎は撲地と姉を揮りとばし、體を脱れて去つてしまつた。

頓、女は驚いて寤めた。始と夢だと知つたのである。越日、士人は歸つて來た。見ると白い騾に乘つて居る。女は異だとはおもつたけれど未言つて居た。士人も是夜亦り夢を見たのであつた。述してみるとそれが悉り符合て居るので互相に駭き怪しんだのである。

既而に、姉夫が遠方から歸つて來たといふのを聞いて三郎が省問に來た。そして語の次に、

「昨宵君が歸つて來た夢を見ましたが果然でした」

といつて大そう異がつた。士人は笑つて曰つた、

「幸せと巨きな石で斃されもしなかつたよ」

三郎は愕いて故を問ねた。士人は夢を告した。三郎は大そう異がつた。其夜三郎も亦り同じ夢を見たのであつた。姉が泣いて事情を訴へるから憤激つて石を投げつけたのである。

三人の夢はかうして符つたが、麗しい人は何許の何者かたうとう不知かつた。

(一) 拱璧といふのは一かかへもある玉といふことである。品物を大事にすることを珍如拱璧といふ、左傳に崔氏之臣曰與我其拱璧とある。

(二) 身體の巨大なこと、史記留侯世家に其人計魁梧奇偉至見其圖狀貌如婦人好女とある。

(三) 左傳に周子有兄而無慧不能辨菽麥とある。

珠兒

常州の李化富といふ民は、有田産だつた。五十餘りになつても子が無かつたので、夫妻は小惠と名ふ容貌秀美の一り女を最う愛憐がつて居たのであるが、十四の歳に暴の病で夭姐したのちは、庭幃が冷落くて、益す生趣が少ないところから、始めて婢を納れたのであつた。一年餘り經つと婢が一子を生けた。(一)拱璧の如に視ふところから珠兒と名之たが、兒は漸だん生長するにしたがひ、(二)魁梧くて可愛らしかつた然ど、性が絶く癡してゐて、五六歳になつて尚、菽と麥の辨ひもできず、言語强澁のであつたが、李は好いので惡いところが分らなかつた。

會ら眇の僧が有つて市で募緣つてゐたが、人の閨闥のことを輙知つてゐる於是、相驚いて神あつかひにした且、人を生しも死しも禍せにも福せにも能るのだと云ひあひ、幾十百千文を索と執名をされても、違背し敢るものは無かつたのであつた。僧は李の家にやつて詣て、百緡を募めたが、李は難之つて十金給つた。受とらないので、

(四) 鞔といふのは大鼓や鼓のやうに皮を張つたもののこと。

(五) 以手疊訣とは俗にいふ印を結ぶこと。

漸だんまして三十金に至つた。すると僧は厲い色をして曰つた、

「必百緡だ！　一文缺けても不可んだ！」

李も怒つて金を收めてしまつた。僧は忿然として起ちあがつて曰つた、

「勿悔勿悔！」

それから無何く、珠兒は心が暴に痛みだして爬刮牀席り、色如土灰になつてしまつたので、李は懼し、八十金將つて僧のところへ詣き、救けてくれと乞むと、僧は笑つて曰つた、

「多なお金は大不易わけですね。然し山僧には何うにも能爲ませんよ！」

李が歸つてくる而、兒は已う死んでゐた。李は甚く慟み、訴狀を呈して邑宰に愬へた。邑宰は僧を捕へて訊鞫が、亦辯給でなかなか無情詞い。笞之と鞔(四)の革を擊つやうである。で、身を搜させると、木の人がたが二つ、小さな棺おけが一つ、小さな旗幟が五つ得つた。宰は怒つて、手を擧げ、(五)以手疊訣で視せた。乃と僧は懼れいつて自投無數し、ゆるしてくれとねがつたけれど、宰は聽ずに杖殺之てしまつた。

李が叩謝をして歸つてきた時には已う曛暮てゐた。妻と牀に坐つてゐる忽、一の小兒が偃儀しながら室に入つてきて曰つた、

「阿翁さんは何ぜあんなに疾く行くの？　兒、極力いで不能得追つたよ！」

兒の體貌を視ると七八歳當得である。李は驚い方、將詰問とおもひ、則、見ると、隱るる

(六) 聽雨記談に人が虎に出逢ふと衣がひとりでに解ける、虎は人が羸せるのを見てから食ふ、それは皆な倀の所爲である、虎に食はれた人の魂はどこへも行かず、虎に仕へる、それを倀といふのだ、といふことが出てゐる。

(七) 五代史に璋、前、經、推、劾、已、蒙、昭、雪、とある昭はあきらか、雪はすすぐ、寃罪にある人の罪を清め明らかにしてやること。

が若く、現はるるが若く、恍惚として霧煙の如く、宛轉の間にやら已う榻に登つて座つてゐるので、李が推下之すと、地に隨ちたが聲もしない。そして、

「阿翁さん、何うして乃爾にするの？」

と曰つたとおもふまに、瞥然と復た登つてゐるので、李は懼がつて妻と俱に奔げだした。

すると兒は、

「阿父さん！　阿母さん！」

と呼びながら、休まず嘔啞をいふのであつた。李は妾の室に入り、急いで扉を閾め、還顧と、兒は已う膝下に在た。李は驚して、

「何爲んだ」

と問ねると、答へて曰つた、

「我、蘇州の人で、姓を詹といふの。六歳のときに怙さん恃さんが失だら、兄さん嫂さんが所容てくれ不爲の。逐ひだされて外祖家に居たの。偶き、門外で戲んでたら、妖い僧さんに迷はされ、桑の樹の下で殺されたの。そして倀鬼の如に驅使はれ、寃いのに窮泉に閉められて脫化ることが不得かつたのを、幸い阿翁の賴に寃を昭雪でもらへたの。願ぞ得爲子くださいね」

李は曰つた、

「人と鬼とは途が殊ふよ。何で能相依れるものか」
兒は曰つた、
「但だ斗室を掃除して、兒の爲めに牀縟を設へ、まい日、冷漿粥を一杯づつ澆へておくれ。餘には都も無事つていいから」
李が從之すると兒は喜ん遂、獨りで室中に臥たのであつたが、晨來と閨閣に出入りして、了と人と異ひは無かつた。そして妾が悲痛聲を聞き、
「珠兒が兒んでから幾日になるの？」
と問ねるので、七日になるよと答へると、
「天が嚴く寒いから、尸は腐んでゐないだらう。試に冢を發て啓で視ん。如も未だ損壞でなかつたら、兒、活れる當得よ」
と曰ふ。李は喜んで兒と與に去き、穴を開て驗之ると、軀殼は如故だつた方此、忉怛んだのであるが、回視と失兒所在なつてゐた。異之ながら尸を舁かして歸つてきて、榻の上に置く方、目が已う瞥ちら動きはじめ、少頃するとお湯をくれと呼ひ、湯をのみ已ると汗をかき、汗をかき已る遂、起きあがつた。群は喜んで珠兒が復生つたといつたのであつた。又加之ず、慧黠便利ことが逈う曩昔と異つてゐた。但だ夜間僵臥から毫も氣息をし無いので、共で轉側之てみると、冥然と死んだ若になつてゐた。衆は大そう愕いて、復た死んだのだと謂

(八) 員外といふのは定員外の役人のことだが、金を納めて役人の株を買ひ員外と稱することも出來たのである。食譜に、餅やの主人が金を納めて員外の株を買つたので、時の人之を花糕員外と呼んだといふことが見えてゐる。斯く金を納めて員外となるものがあるところから、後には資産家の主人を尊稱して員外といふやうにもなつた。

(九) 白鼻騧は貴族的なもので、李白の詩にも銀鞍白鼻騧、綠地障泥錦などとある。

つたのであるが、天將明になる始、夢の醒めた若にしてゐるので、群で就問之ると、答へて云つた、

「昔に妖しい僧に從てゐた時にはね。兒等は二人で、其一は哥子といふ名だつたの。昨ふ阿父に追不及かつたのは、後にのこつて在て、哥子と別ごひを作てたからなんだよ。哥子は今では冥間で姜員外(七)の義嗣になつて亦甚優遊をしてゐるの。因、夜分戯に兒を邀へに來たの。そして適まお鼻(九)の白いお騧で兒を送り歸したんだよ」

母さんは、因、

「陰司に在るときに珠兒を見なかつたかい?」

と問ねると、兒は、

「珠兒は已う轉生つたんだよ。渠は阿父さんとは父子の緣はないんだよ。金陵の嚴子方が百十千の債負を討に來た不過よ」

と曰つた。初、李が金陵に販にいつたとき、嚴に貨價の未償があつた。而て巖翁は死んでしまつた。此事は知つてる人が無いのだから、李は之を聞くと大そう駭いたのであつた。

母さんは問いた、

「兒惠姉さんを見た否?」

兒は曰つた、
「知らないよ。又去つて當訪之」
それから二三日すると母さんにさう曰つた、
「惠姉さんはね、冥中に在て大へん好いんだよ。楚江王の小郎子のお嫁に得てね、頭髻は珠翠で滿よ。そして一と門を出る便ね、十百のけらいが、呵殿聲を作るんだよ」
母さんは曰つた、
「何ぜ一も歸寧をしないの？」
兒は曰つた、
「人は既死ふと、都かり骨肉の關切が無くなるんだよ。倘しも細く前の生のことを述す者が有る方、谿然して動念んだよ。昨ふ姜員外に託んで、賓緣をしてもらつて姉さんに見つたらば、姉さんは我を呼んで、珊瑚の牀の上に座らしてくれた。それから與にお父さんやお母さんが懸念てることを言したけれど、渠は都で眠睡の如だつたの。それで兒がね、姉さんが生きて在る時には、並蒂花を繡ふのが喜きだつたでせう。剪刀で手爪を刺いて血が綾子の上に浣たでせう。姉さんが就に刺をして赤水雲を作らへたでせう。今でもお母さんは猶り牀頭の壁にそれを掛けて顧念不去心ゐるんだよ。姉さんは之を忘れたの、ト云つたら、姉さんは始て凄感つてさう云つたよ。會に郎君に白あげて阿母を省に歸らなければ須つ

て、」

で、母さんが其の期を問ねると、

「知らないよ」

と答言たのであつたが、一日お母さんにむかひ、

「姉さんが行且至。僕從が大繁だから漿やお酒を多備しなければだめだよ」

と謂つた。そして少間すると室に奔入み、

「姉さんが來たから榻を中堂に移つてお置きよ」

と曰つて、また、

「姉さん。且、憩坐。少悲啼よ」

と曰ふのであつたが、諸人には悉く何も無所見かつたのである。

兒は人を率れて祭りの紙を焚かせ、門外に酬飲させてから反つて曰つた、

「騶從は暫と令去ておいたよ。それから、姉さんがさう言つてるよ。昔日覆けてゐた綠錦の被で、曾か一點り如豆大に爲燭花燒たのは尙だ在るかつて」

母さんは、

「在るよ」

と曰つ卽、笥を啓けて之を出してやると兒は曰つた、

「姉さんは、我に、これを舊の閨中に陳けつて、命けたんだ。乏疲たから、且小臥て、翌日再た阿母さんと與に言しますとさ」

東隣の趙氏の女は、故から惠と爲繡閣交であつたが、是夜、忽、惠が幞頭をかぶり、紫の帔をきて、來相望た夢をみた。平生の如に言笑た且へ、

「我今は異物ですから、父母が覿面にゐるのに、河山をへだてた不啻なんです。で、妹子のからだを借りて家人と共に語さうとおもふんですの。勿須驚恐でくださいね」

と曰つた。女は質明て方ど母おやと言してゐるうちに忽ち撲地悶絶し、蹂刻して始ら醒いた。そして母おやに向ひ、

「小惠が阿嬸と別れて幾年かおめにかからないうちに、頓に鬖々白髪がお生へになつたのね」

と曰つた。母おやは駭いて、

「兒、病狂つたんじゃないかい」

と曰つてるうちに、女は拜別をし即、出ていつた。母おやは異いことのおこつたのを知つたので、從之てゆくと、直に李のうちに達いた。そして母さんを抱いて哀しみ啼くのであつた。母さんは驚いて不知所謂にゐると、女は曰つた、

「兒、昨、歸ると、頗う委頓たもんですから、一言をする遑もなかつたんですわ。兒、ほ

(一〇)髪の亂れたかたちである。

んとに不孝ものですわね。途中で高堂を棄ててしまつて、お父さまやお母さまに哀念を勞るなんて。兒の罪は何可贖んわ」

お母さんは頓に悟つ乃、哭いたのであつたが、已而て問曰た、

「兒が今では貴いみぶんになつてると聞いて、母さんの心は甚う慰められたんだよ。但ど、汝へ王さまの家に棲身てゐるのに、何して遂能來だえ?」

女は曰つた、

「卽君は兒と極く燕好んですし、姑さまや舅さまも相撫愛て、頗不謂妒醜いつておつしやつてるんですのよ」

惠は生きてる時、好く手で以て頤を支へる癖があつたが、女も言次に輙く故のやうな態を作た。そして神や情が宛似であつた。

未幾く、珠兒が奔つて入つてきて曰つた、

「姉さんを接の者が至ましたよ」

女は乃と起ちあがり、別れの拜をして泣下ながら曰つた、

「兒、去りますわ」

言つて訖ふと復た踣れ、移時て乃ら甦つたのであつた。

その後、數ケ月たつて、李は劇い病氣にかかり、醫藥の効も罔かつた。すると兒が曰つた、

（二）羔は毒蟲でよく人を傷る。古の人草居露宿せる故、早く相見て勞を問ふに必ず羔無きやと曰へり風俗通にある。

「旦夕も不效くなりはしないかとおもふよ。二の鬼が牀頭に坐つてるんだもの。一は鐵の杖子を執ち、一は長さが四五尺許ある苧麻繩を挽げてるんだよ。兒い晝も夜も哀之けれど去かないんだよ」

母さんは哭いた。乃て死に衣衾の備をした。既て暮れた。と、兒が趨けて入つてきて、

「雜人婦、且と避去つておくれ。姉さんの夫さんが、阿翁さんに視ひに來るから」

と曰つて俄頃、掌を鼓いて笑ふので、母さんが問之ると、

「我が笑つたのはね、一の鬼が姉さんの夫さんが來るといふのを聞くと、牀の下に匿れて、龜鼈みたいになつてるからだよ」

と曰つた。それから又少時するとなにも空いところを望ながら時候の寒喧を道ひ、姉夫の起居を問くのであつたが、既て掌を拍つて、

「二の鬼奴、哀之だときには去なかつたが、至此つてみると大快だなあ」

と曰つた。乃て門外へ出て至き、郤回つてきて曰つた、

「二の鬼は、鎖で、馬の鞅上にしばられたんだよ。阿父さんは當卽と無恙るよ。姉さんの夫さんがさう言つたもの。歸つて大王に白しあげ、父母の爲めに百年の壽命を乞ふつて」

それを聞くと一家は俱に喜んだのであつたが、夜に至ると、病氣は良し已なり、數日の後尋く瘥つたのであつた。

師を延んで兒に讀書を敎へると、兒は甚う慧で、十八のとしには入邑庠たが、猶り能く冥間事を言すのであつた。あるとき、里中の病人を見て、鬼の祟つて在る所を指し、火で以て之を爇けば往々得瘥るとをしへてやつた。後ち暴に病氣になり、體膚が青や紫になつたので、自ら、

「鬼神が、我の綻露を責めるんだ」

と言ひ、由是は復言はなくなつた。

(一) 禮の厚くないものとは左傳に不腆敝器不足辭とある。

(二) 易の束帛戔々の注に戔々は淺小之意とある。

小官人

太史の某公とばかりで、其姓を忘れたが、書齋で晝寢をしてゐる忽、堂の隅から小さな鹵簿が出てきた。馬は如蛙の大さ、人は如蟻の細さであつたが、數十隊かの小さな儀仗のなかに、卓い紗の冠をいただき、繡の幞を着け、肩輿に乘つた一の官があつて紛々と門を出て去つた。

公は心のなかで異之だけれど、また竊かに睡眠之訛だらうともおもつてゐると頓て一の小人が如拳の大さの氈の包を携つて、舍のなかに返入きた。そして徑ぐ牀の下に造て自言つた。

「家どもの主人から、(一)こそまつなおくりものは、有りますが、敬しんで太史に獻ます」

言つて已ふと、對つて立つて居た。卽又、其物は陳さなかつた。そして少間する又、自笑ひながら、

「戔々微物(こつまらないもの)なんですから太史は、當亦、無所用と想はれます。不如、小人に賜いません

か」

と曰つた。そして太史が頷之と、欣然で、之を携つて去つてしまつたぎり、復う見へなかつた。太史が中餒くて、所自來たかを話はなかつたのは惜しむべしである。

(一) 張登傳に夢結、遐想とある、遠く離れて居る人を遐に想ふことであるが、ここでは夢のやうなことを思ふと譯しておく。

胡四姐

尙生は泰山の人で、ただ獨り淸らかな書齋にすんで居たが、會値秋の夜で、銀河が高く耿とながれ、明月がなか空にかかつてゐたので、花の陰を徘徊ながら頗存遐想つて居る忽、一の女子が垣を踰えて來た。そして笑ひながら、

「秀才何をそんなに思之深でるの?」

と曰つた。就視ると、それは仙人の若な容華の女子であつたから、驚喜で書齋に擁入れ、窮極狎昵のであつた。

女子は自から、胡といふ氏で、三姐といふ名であると言つたが、其居第を聞くと、但だ笑つてゐるばかりで不言かつた。で、生も不復置問いで、惟だ相期永好而已だつた。

自此は無虛夕に臨るのであつたが、一夜のこと、燈幕のしたで、膝を促はしてすわつてゐるのを、愛しく矚眸不轉ると、女は笑つて曰つた、

「耿々妾を視て何爲るのよ」

(三) 白眼は白い眼をしてにらむこと、青眼は黑い眼でやさしく見ること、青盼は青眼のこと。

生は曰つた、

「我は卿を紅藥か碧桃の花の如に視めてゐるんだ。卽ら、竟夜視めて居ても不爲厭んだ」

女は曰つた、

「陋質な妾を、遂に青盼若此んだから若も吾家の四ばんめの妹でも見たら不知顚倒何似いわ」

生はそれを聞くと、益傾動つて恨不一見顏色だといひ、長跪いて哀請むのであつた。踰夕になると、果に四ばんめの姐を偕れて來た。みると、年のころは方及笄で、露の垂る荷粉か、煙に潤ふ杏花か、嫣然笑ひを含んだ媚麗さは欲絕なるやうである。生は狂喜こんで、引ぱつて座わらせたのであつたが、三姐と生とが同笑語をして居ると四姐は惟だ繡をした帶を手引つて俛首いてる而已であつた。未幾に三姐が起ちあがつて別れをつげると、妹も從行かうとするのを、生は曳之て不釋かつた。そして三姐を顧て曰つた、

「卿々煩一致聲ておくれな」

三姐は、乃と、笑つて曰つた、

「狂郎情急なんだから、妹子、一爲少留おあげよ」

四姐は無語つてゐた。三姐は遂去つた。で、二人は備盡歡好つた既而、引臂て枕に替へつ